

近畿自動車道舞鶴線建設に伴う

鴨 庄 古 窯 跡 群 (2)

-上牧2・7・8号窯跡-

1991年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

近畿自動車道舞鶴線建設に伴う

鴨 庄 古 窯 跡 群 (2)

-上牧2・7・8号窯跡-

1991年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 遺構と遺物	
第1節 窯跡の概要.....	5
第2節 2号窯.....	6
1. 窯体の構造.....	6
2. 遺物.....	9
第3節 7号窯.....	12
1. 窯体の構造.....	12
2. 遺物.....	15
第4節 8号窯.....	33
1. 窯体の構造.....	33
2. 遺物.....	34
第5節 9号窯.....	47
1. 調査の概要.....	47
第4章 まとめ.....	49

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	2号窯位置図	5
第3図	7・8号窯及びトレンチ位置図	6
第4図	2号窯地形図(調査後)	6
第5図	2号窯実測図	7
第6図	2号窯遺物(1)	10
第7図	2号窯遺物(2)	11
第8図	7号窯実測図	13
第9図	7号窯地形図(調査後)	15
第10図	7号窯遺物(1)	16
第11図	7号窯遺物(2)	17
第12図	7号窯遺物(3)	19
第13図	7号窯遺物(4)	20
第14図	7号窯遺物(5)	22
第15図	7号窯遺物(6)	23
第16図	7号窯遺物(7)	25
第17図	7号窯遺物(8)	26
第18図	7号窯遺物(9)	27
第19図	7号窯遺物(10)	28
第20図	7号窯遺物(11)	30
第21図	7号窯遺物(12)	31
第22図	7号窯遺物(13)	32
第23図	8号窯地形図(調査後)	33
第24図	8号窯実測図	35
第25図	8号窯遺物(1)	37
第26図	8号窯遺物(2)	38
第27図	8号窯遺物(3)	39
第28図	8号窯遺物(4)	41
第29図	8号窯遺物(5)	42
第30図	8号窯遺物(6)	43
第31図	8号窯遺物(7)	44
第32図	8号窯遺物(8)	46

図 版 目 次

図版 1 遺跡周辺航空写真	下、7号窯出土土器⑬
図版 2 上、2号窯遠景（調査前）	図版19 7号窯出土土器⑭
下、2号窯遠景（検出時）	図版20 上、7号窯出土土器⑯
図版 3 上、2号窯遠景（調査後）	下、7号窯出土土器⑯
下、2号窯焼成部先端近景	図版21 上、7号窯出土土器⑰
図版 4 上、7号窯遠景（調査前）	下、7号窯出土土器⑱
下、7号窯遠景（調査後）	図版22 7号窯出土土器⑲
図版 5 上、7号窯近景（調査後）	図版23 上、8号窯出土土器(1)
下、7号窯焼成部土器検出状況	下、8号窯出土土器(2)
図版 6 上、7号窯焼成部付近土層断面	図版24 上、8号窯出土土器(3)
下、7号窯焚口付近土層断面	下、8号窯出土土器(4)
図版 7 上、7号窯前庭部灰層断面	図版25 上、8号窯出土土器(5)
下、7号窯灰原土層断面	下、8号窯出土土器(6)
図版 8 上、8号窯遠景（調査前）	図版26 上、8号窯出土土器(7)
下、8号窯遠景（調査後）	下、8号窯出土土器(8)
図版 9 上、8号窯土層断面	図版27 上、8号窯出土土器(9)
下、8号窯土器検出状況	下、8号窯出土土器(10)
図版10 上、8号窯灰原土層断面	図版28 上、8号窯出土土器(11)
下、8号窯灰原土層断面	下、8号窯出土土器(12)
図版11 上、2号窯出土土器(1)	図版29 上、8号窯出土土器(13)
下、2号窯出土土器(2)	下、8号窯出土土器(14)
図版12 上、7号窯出土土器(1)	図版30 上、8号窯出土土器(15)
下、7号窯出土土器(2)	下、8号窯出土土器(16)
図版13 上、7号窯出土土器(3)	図版31 上、8号窯出土土器(17)
下、7号窯出土土器(4)	下、8号窯出土土器(18)
図版14 上、7号窯出土土器(5)	図版32 上、8号窯出土土器(19)
下、7号窯出土土器(6)	下、8号窯出土土器(20)
図版15 上、7号窯出土土器(7)	図版33 上、7・8号窯出土長頸壺(240のみ7号窯)
下、7号窯出土土器(8)	下、7・8号窯出土壺(耳)
図版16 7号窯出土土器(9)	図版34 上、7・8号窯出土高坏(104のみ8号窯)
図版17 上、7号窯出土土器(10)	下、8号窯出土短頸壺
下、7号窯出土土器(11)	図版35 上、7号窯出土壺(1)
図版18 上、7号窯出土土器(12)	下、7号窯出土壺(2)

例　　言

1. 本書は兵庫県水上郡市島町上牧に所在する上牧2号・7号・8号窯及び9号窯確認のためのトレンチ調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施し、整理作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。
3. 発掘調査は、日本道路公団による近畿自動車道舞鶴線建設に伴うものであり、兵庫県教育委員会が調査主体となり、輔老拓治・吉田昇が担当した。
また、作業は市島町上牧・南地区の方々の協力のもと実施した。
4. 本書に使用した実測図及び製図は石本淳子・宮田麻子・広戸紀子・木村淑子・和田早芳子・本窪田英子・原美津子・富ひとみ・村松馨・末廣恭子が行った。
5. 本書で使用した写真の撮影は、遺跡を吉田がを行い、遺物の撮影については鶴サンスタジオの手を煩わした。
6. 遺物番号の表示は挿図・図版・本文を通して統一し、各窯単位で1番から表示し、図版のみのものについては、500番代で示した。
7. 本書で示す標高値は、日本道路公団設定のB・Mを使用し、方位は磁北を示す。
8. 執筆編集は吉田が、石本淳子協力のもとにあたった。
9. 執筆・刊行にあたっては、下記の方々の指導、御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

五十川伸矢・大平　茂・菱田　哲郎・松下　勝・村上　泰樹・山下　史郎・
山本　誠・吉織　雅仁

第1章 調査に至る経過

日本道路公団による高速道路の建設は、全国に高速道路網をはりめぐらせる構想のもとに、昭和30年代の名神高速道路建設に始まり、今日まで多くの高速道路が計画され、すでに完成されている。

その後、兵庫県に於いても、列島を東西に横断する高速自動車道として、すでに中国自動車道が計画され、完成して今日に至っている。

今回計画されている近畿自動車道舞鶴線は、京都府舞鶴市から兵庫県美嚢郡吉川町に至り、吉川ジャンクションにて、中国自動車道に接続する、延長76.5kmの高速自動車であり、兵庫県を南北に縦断する最初の自動車道として、日本海地域から瀬戸内方面へと結ぶ幹線道である。

行政区画として、この自動車道は県内の氷上郡市島町にて京都府から連なり、春日町、多紀郡西紀町・丹南町、三田市を経て美嚢郡吉川町に至る。

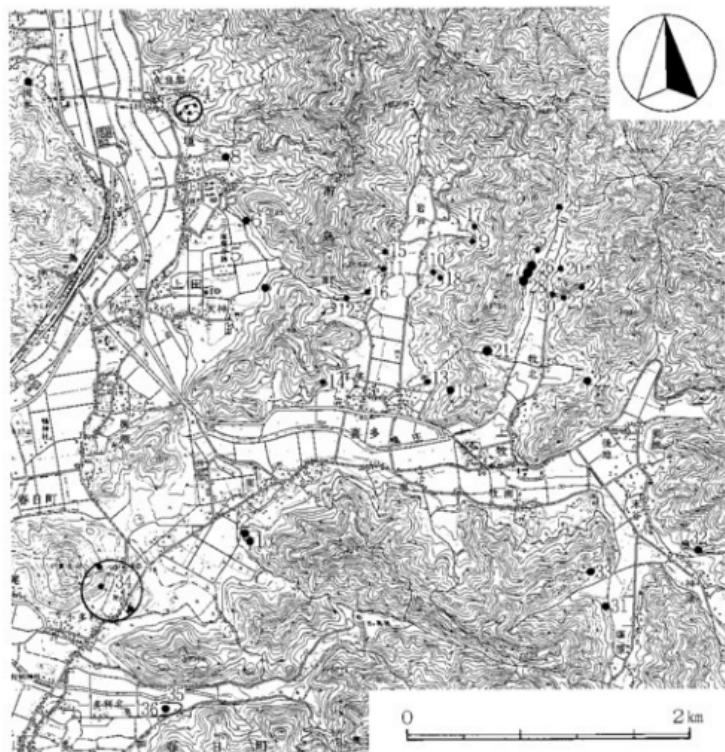
昭和53年度近畿自動車道舞鶴線の建設計画が具体化するにあたって、兵庫県教育委員会は日本道路公団大阪建設局と協議し、遺跡の推定所在地の確認を開始した。

当該地域の遺跡所在推定地は、昭和43年度に国庫補助事業として実施された、遺跡分布調査地図が作成されており、これらを周知の遺跡とし、昭和56年度に更に、近畿自動車道建設に先立つ遺跡分布調査を実施した。

この結果、当該路線内では市島町上牧古窯跡・南1号窯跡を始め、春日町七日市遺跡・多利遺跡、丹南町庄境古墳群・西紀町西木ノ部遺跡など53地点の遺跡または包蔵地が確認された。

以上の経緯から、昭和56年度に入り、11月より多紀郡丹南町の杉、西吹散布地の確認調査を皮切りに、庄境2号墳の調査を実施し、氷上郡では当古窯跡の調査を最初に、昭和57年度から実施することとなった。

当窯跡の調査は昭和57年4月12日から開始し、7月末日をもって終了した。



1. 南 1 号窯跡	2. 南 2 号窯跡	3. 北岡本古墳	4. 久良部古墳群
5. 三ツ塚遺跡	6. 三味古墳	7. 天神瓦窯跡	8. 上垣 1 号窯跡
9. 岩戸 1 号窯跡	10. 岩戸 2 号窯跡	11. 岩戸 3 号窯跡	12. 岩戸 4 号窯跡
13. 岩戸 5 号窯跡	14. 岩戸 6 号窯跡	15. 岩戸 7 号窯跡	16. 岩戸 8 号窯跡
17. 岩戸 9 号窯跡	18. 岩戸 10 号窯跡	19. 喜多中世墳墓群	20. 上牧 1 号窯跡
21. 上牧 2 号窯跡	22. 上牧 3 号窯跡	23. 上牧 4 号窯跡	24. 上牧 5 号窯跡
25. 上牧 6 号窯跡	26. 上牧 7 号窯跡	27. 上牧 8 号窯跡	28. 上牧 9 号窯跡
29. 上牧 10 号窯跡	30. 上牧 11 号窯跡	31. 北奥 1 号窯跡	32. 北奥 2 号窯跡
33. 北奥 3 号窯跡	34. 柏野古墳群	35. カナヅキ遺跡	36. カナヅキ古墳

第1図 周辺遺跡分布図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

氷上郡市島町は、兵庫県中央部の東端に位置する。旧丹波国に所属し、北を京都府福知山市と、南を氷上郡春日町、西を氷上郡青垣町に接している。

町の中央部を流れる竹田川は、福知山市で合流して土師川となり、更に北へ下って由良川となって日本海へと注ぐ。南は国道175号線で旧播磨國に続いており、河川的にも、氷上町石生に見られる分水嶺を境に、佐治川・加古川となって南流し、瀬戸内海へと注ぐ。まさに、兵庫県と京都府を南北に縱断し、瀬戸内海から日本海へ通じる重要なルートであり、戦前の舞鶴港・福知山へと連なる要衝の地域への通路でもあった。

町域は、標高565mの妙高山や高谷山を中心とする土地によって、大部分が占められており、偏狭な平野部は、竹田川及び竹田川に注ぐ支流の流域に見られる。竹田川流域には、河岸段丘が発達しており、複数の段丘構成が見られる。

竹田川の支流、鶴庄川の流域には、谷地形の明瞭な地域が存在し、黒堀地帯に於ける窯構築の場を提供している。

第2節 歴史的環境

今回調査の実施された窯跡周辺の埋蔵文化財については、国史跡の「三ツ塚遺跡」^(註1)を除いて、何ら知られていなかったと言っても過言ではない。

周知の遺跡としては、春日町の前方後円墳「二間塚」他僅かな古墳であり、春日町棚原出土の磨製石劍のように、多くは偶発的に発見された遺物が知られている。

そんな中で、昭和56年偶然の発見による、野々間の山裾出土銅鐸は、特記すべきものであり、事後の確認及び追加調査によって、更に1口の銅鐸が出土し、一躍この地域が注目されるようになった。

その後、圃場整備事業、あるいは近畿自動車道舞鶴線の建設に伴い、原始・古代の丹波を知る上で貴重な資料を提供している。

近畿自動車道舞鶴線建設に伴う発掘調査では、春日町国領遺跡で弥生時代後期と中世前半の集落址が、松ノ本及び多利では古墳群が調査され、5世紀から7世紀にかけての古墳群の内容が判明している。

平野部では、野村石劍出土地の北にあたる山垣遺跡から、奈良時代前半の里長に関係する木簡や木製品を伴って、多くの遺構・遺物が出土している。インターチェンジ建設予定地の七日市遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代初期の、周溝墓及び住居址を伴った集落が大規模に見つかっており、更には、平安時代前半期の氷上郡衙と思われる掘立柱建物群も見つかっている。特に注目を集めたのは、最下層から見つかった先土器時代の遺

物であり始良火山灰を伴った石器群の出土で、一度にこの地域の歴史の始まりを、古くまで遡らせてしまった。

^(四五) 多利遺跡は平安時代後半から鎌倉時代前半の遺跡であり、和鏡・輸入磁器を副葬した土塚墓や掘立柱建物址群などが見つかっている。

市島町域の遺跡では、昭和47年度以降数次にわたる調査の実施された「三ツ塚遺跡」があり、金堂を中心として両側に東西二塔が一直線上に並ぶ、「新治廃寺式」の伽藍配置を有する寺院址を中心に、掘立柱建物群、弥生時代の遺構・遺物が複合的に発見されている。背後の山裾に所在する天神瓦窯跡は、三ツ塚の寺院址に供給されていた瓦の窯跡である。

^(四六) 久良部古墳群は比高30m余りの尾根筋に立地する古墳群である。調査の実施された1号墳は10m未満の円墳であり、内部主体に堅穴式の石室を持つ。石室内からは、径9.2cm撲文鏡が1面出土している。墳丘外部には外護列石が巡っている。尾根山には他に2基の同様の古墳が存在し、更に100m隔てた所には「孤塚」と呼ばれる古墳も見られる。

群集墳では、戸坂字長者ヶ野所在の長者ヶ野古墳群が見られ、數基からなる円墳で構成されている。横穴式石室を内部主体とする古墳では、北岡本古墳や上垣の三昧古墳が知られているが、古墳の絶対数としては非常に少なく、今後発見増加の可能性が高い。

窯跡については、古くから知られていたようで、市島町史実研究会による踏査なども行われており、更に、三ツ塚遺跡発掘調査団の方々による、詳細な調査・報告によって、ほぼ全容が知られている。

現在、30基程の須恵器窯跡が知られ、鴨庄古窯跡群と称している。

三ツ塚遺跡の北に1カ所、岩戸の谷に11カ所、上牧の谷に11カ所、末谷の奥に3カ所、南村の南に2カ所である。最も古い窯跡は、現在の所、南と岩戸の谷入口の2カ所であり7世紀前半と考えられる。その後は少し間を置いて、岩戸の谷から上牧の谷へと繼續して操業され、末谷の北奥にて終了する流れが見られるが、最近、南1号窯跡のすぐ西で、繼續すると思われる時期の窯跡が見つかっており、今後新発見の可能性も高いが、大きな流れとしては変化しないであろう。

喜多の背後の山筋には、中世墳墓の群集が見られ、近畿自動車道舞鶴線建設に伴って調査が実施された。

註1. 市島町「丹波三ツ塚遺跡I～III」1973年～1981年

2. 春日町「野々間遺跡」1990年

3. 兵庫県教育委員会「山垣遺跡」1990年

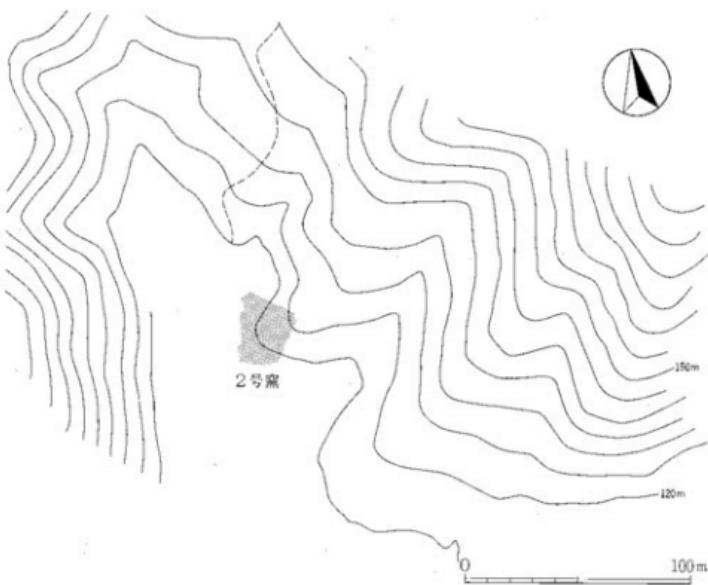
4. 兵庫県教育委員会「七日市遺跡(1)(2)」1990年

5. 兵庫県教育委員会「多利遺跡群」1987年

6. 市島町「久良部1号墳」1987年

第3章 遺構と遺物

第1節 窯跡の概要



第2図 2号窯位置図

市島町所在の当窯跡群は、鴨庄古窯跡群と称されており、竹田川の支流である、鴨庄川に向かって開口する、南・岩戸・上牧・北奥の各支群から成っている。

今回調査の実施された各窯跡は、全て上牧谷の支群に属しており、上牧谷の西側山裾に位置する。

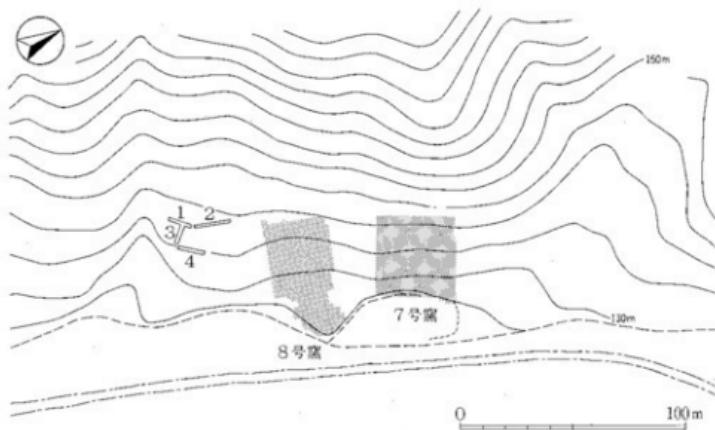
しかし、2号窯と7・8・9号窯はかなり離れており、7～9号窯はほぼ隣接する。

2号窯

2号窯跡は南に開口する上牧谷の入口近くに位置し、谷が東西に拡がる部分の西側奥にあたる。

窯跡の所在する所は、岩戸の谷へと通ずる山道となっており、現在の上牧墓地の西に隣接している。

標高では100m前後付近に立地する。



第3図 7・8号窯及びトレンチ位置図

7・8・9号窯

7・8・9号窯跡は、上牧谷の奥深くに隣接して立地し、奥から順に、7号・8号・9号窯と呼称している。

7号窯は標高135～140mの付近に位置し、下方に灰原が拡がっており、今回の調査で、窯体と灰原の全容が調査によって知られた唯一のものである。

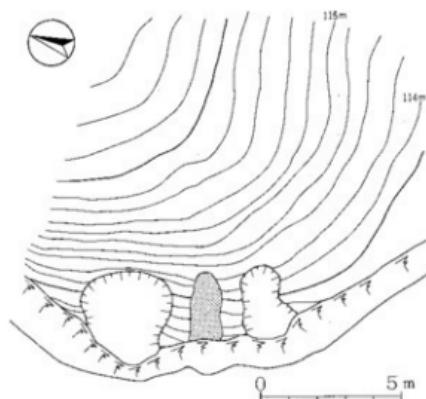
8号窯は7号窯の南20m付近に位置しており、近舞線の計画路線内には、窯体の下方部分の一部と、灰原が認められた。

9号窯は路線内に窯体・灰原が存在するか不明確な状態であった為、一応トレンチ4本による確認から、調査を実施した。結果は、窯体・灰原共に路線外に存在すると考えられ調査は実施されなかつた。

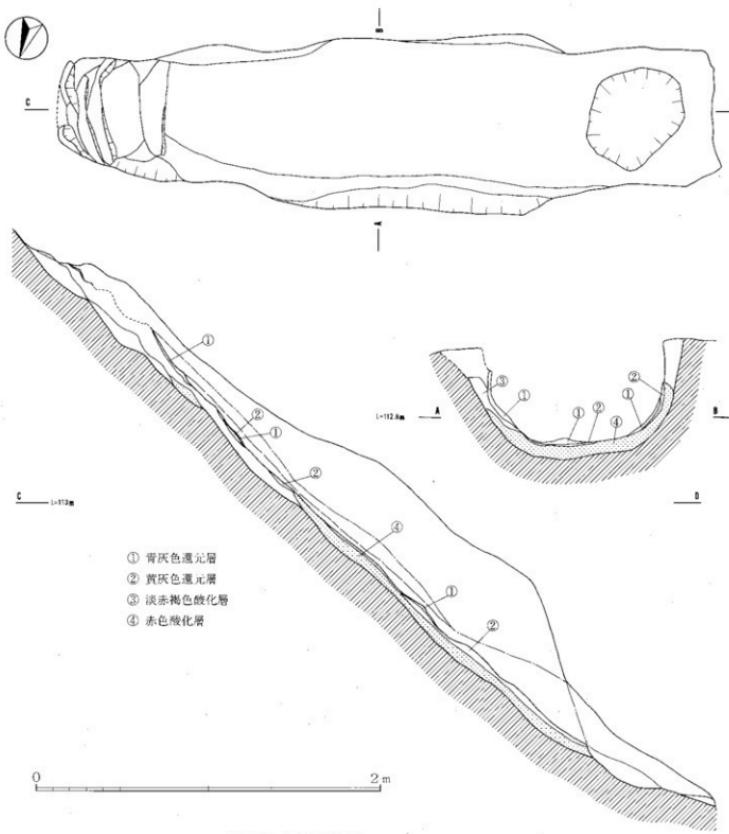
第2節 2号窯

1. 窯体の構造

2号窯は山道によって窯体の下部が切断されており、崖面にて窯体断面が見受けられた事が、窯跡



第4図 2号窯地形図（調査後）



第5図 2号窯実測図

発見の発端となっている。

窯体の規模は、下部が切断されている事を考慮しても、比較的小型で、現存長3.8mの半地下式の窯である。

窯体の幅は、焚口付近で0.8m、焼成部で1m、先端部で0.65mを測る。

窯体主軸の方位はN70°Eであり、細長い形態を呈す。

焚口前方には、不整円形の浅い土塹が見られる。

側壁の立ち上がりは、焼成部付近で40cm前後残存し、床面の傾斜は、焚口から焼成部にかけて40°、先端部に向っては47°となる。

2号窯の特徴としては、窯体先端部付近に段を持つことで、階段状に4~5段の平坦面が形成されている。

また、この段には、焼台状に土器が置かれており、機能的な構造が想定される。

たち割り調査の結果、床面・側壁共に1枚であり、補修等の形跡も窺えなく、操業期間の短い窯跡と考えられる。

灰原は、焚口以下が道路下に埋没している様子から、下方の水田下に存在すると想定し重機による掘下げを実施したが、明白に検出されず、谷部に存在する状況から、消滅(流失)しまっているものと思われる。

2. 遺 物

2号窯出土の土器は前述の理由により、全て窯体あるいは、窯体付近のもので、灰原出土のものは採集されていない。

窯体内出土の土器には、42個体の床面に密着した土器群が残存しており、最終床面に伴う資料と考えられる。

2号窯出土土器の器種構成としては、壺A・壺B・蓋・皿・長頸壺・甕などが見られる。

蓋 (第6図1~11)

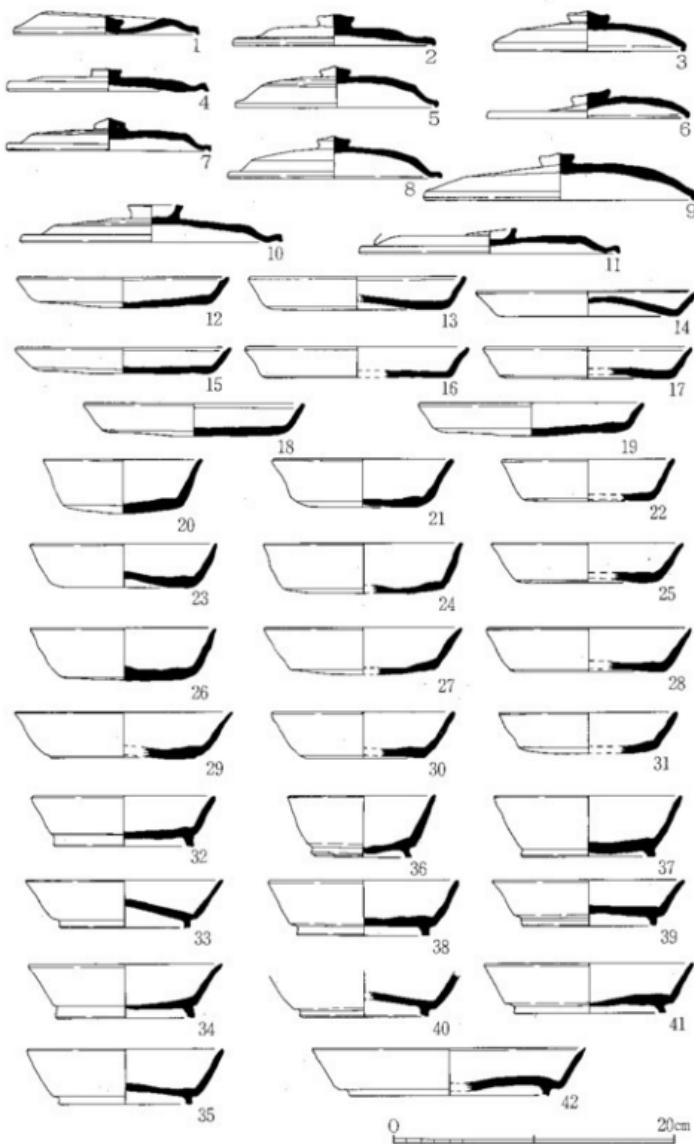
口径で見ると、13cm(1)から19cm(9)まで見られるが、14cm前後と18cm前後の2群に区分される。

摘みは扁平で中央部の高いタイプ(1~9)と、輪状のもの(10~11)の2タイプが見られ、口径18cm前後のものに後者が当る。

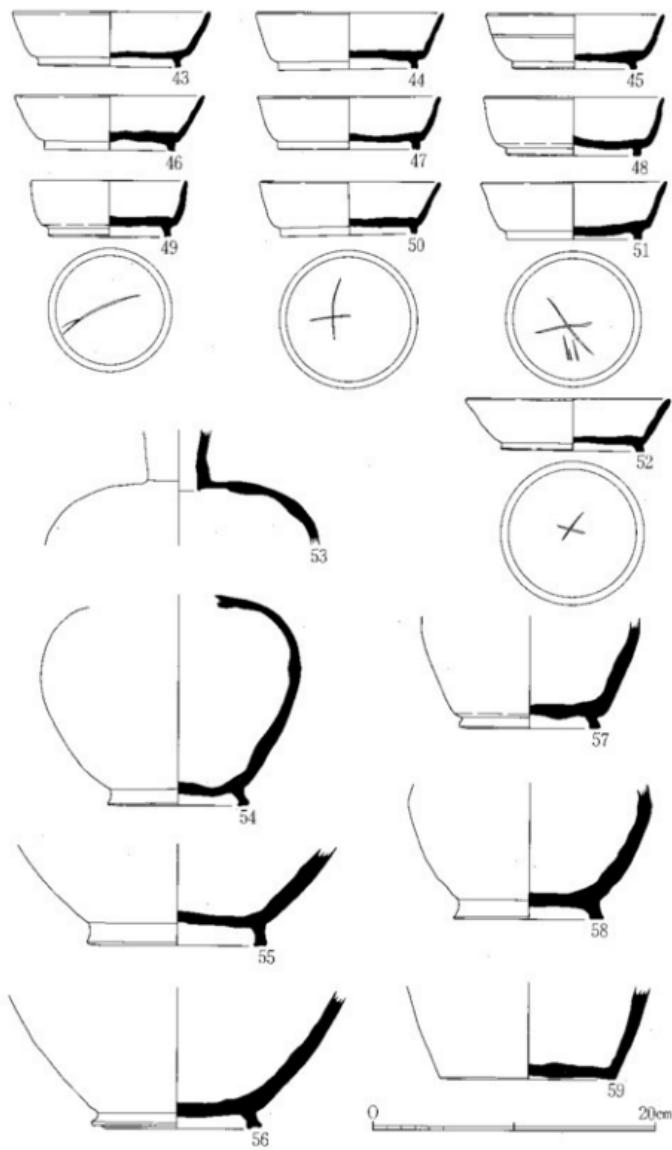
形態的には、天井部から口縁にかけて、緩やかに傾斜し、口縁端部が下方に短く屈曲するもの(3・6・9)と、天井部と口縁部との境界に段をなし、端部が下方へ短く屈曲するもの(1・2・4・5・7・8)が見られ、後者の端部に鈍い稜をもつもの(4)もある。また、天井部が低くて直線的なもの(2・4・7)とそうでないものがある。

皿 (第6図12~19)

皿は全て高台の付かないもので、口径15cm前後を中心とする。



第6図 2号窯遺物(1)



第7図 2号窯遺物(2)

体部から口縁部は直線的かやや外反気味に立ち上がり、口縁部内面に沈線の見られるもの（12・14・15・17・18）が多く見られる。内外面共に、ナデによる調整が見られる。

环A（第6図20～31）

高台を持たない环であり、口径11cm（20）を最小に、最大15.2cm（29）が見られるが、12cm前後と14cm前後に大きく分かれる。

底部は、ほぼ平底であるが、口径の小さなもの（20）に、少し底の出っ張るものが見られる。形態的には、底部から大きく外方に開く体部が、直線的に立ちあがり、口縁部端部付近で若干外反するものであり、端部は丸く仕上げられている。

环B（第6～7図32～52）

高台の付く环であり、口径は14cm弱を中心に、最小10.3cm（36）、最大19.4cm（42）のものが見られる。

形態的には、体部が底部からごく僅かに内弯気味に立ちあがり、口縁部端で少し外反するもの（43・45・47～49）と、底部から直線的に外反し、そのまま口縁部に続くものが見られる。

高台は底部の外周近くに、断面四角か台形で、外方に踏ん張って付くものが多いが、1部に内傾気味のもの（35・39・48）も見られる。また、体部中央やや口縁部よりに、1条の凹線を施すもの（45）もある。

調整は、全体的にナデによる調整が施されているが、底部外面にはヘラ切り未調整のものも存在する。

底部外面に「×」印のヘラ記号を持つものが見られる。

壹（第7図53～59）

完形品となるものは見られないが、所謂長頸壺の類となるものが多い。

底部に高台を持つものがほとんどであるが、持たないもの（59）も1点見られる。

口径・器高は明確ではないが、体部は全体に丸味を持ち、肩部付近に最大径を持つ。

高台は高く、外方に踏ん張るタイプで、脚端部内面で接地するもの（54・56）も見られる。全て窯体内床面よりの出土である。

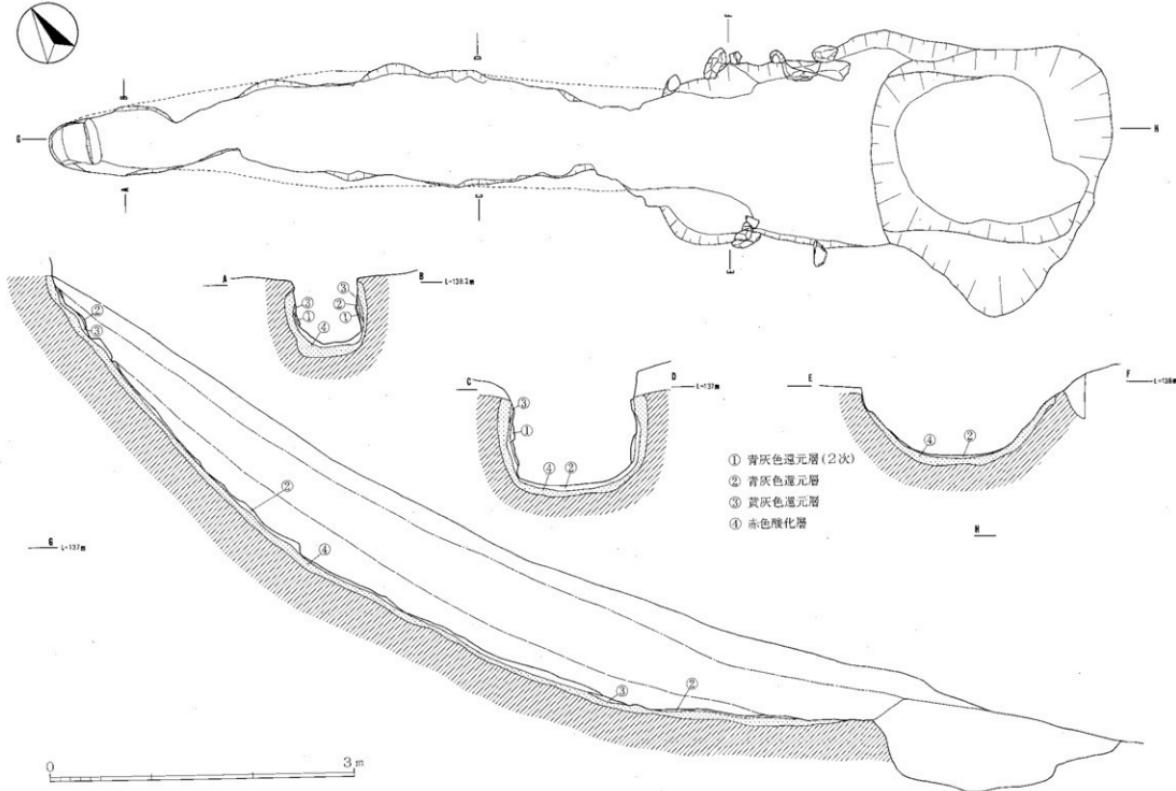
第3節 7号窯

1. 窯体の構造

窯は全長8.1mの半地下式の窑窯である。

今回調査を実施した窯跡の中で、全容を知る事の出来る唯一のものであり、残り状態は非常に良い。

窯体の幅は焚口で1.9m、焼成部で1.25m、先端部で0.6mを測る。全長の割りに、幅の狭い、焚口からあまり開かないまま、先端部で狭まる形態で、細長い感じの強いものである。



第8図 7号窓実測図

側壁は焚口で0.45m、焼成部で0.65m、先端部で0.3m残存する。

前庭部は径2.5m程の不整形な形態を呈しており、焚口部とは少し段を持って下がり、緩やかな舟底状となる。

また、焚口付近には、床面中央から右寄りに径15~20cmのピットが見られ、側壁付近に見られる角礫と共に、何らかの構造物を想定させる。

床面の傾斜は、焚口から焼成部にかけては24°を測るが、先端部にかけては48°となっている。

窯体主軸の方位はN58°Wである。

断ち割り調査の結果、床面は1枚であるが、壁面で2枚の補修痕が認められる。

灰原は広範囲に拡がっているが、灰層の堆積は厚くない。

また、窯体の左右外側には、地山を削平した凹みが見られ、特に左側には顕著であり、排水の用途等が考えられる。

2. 遺 物

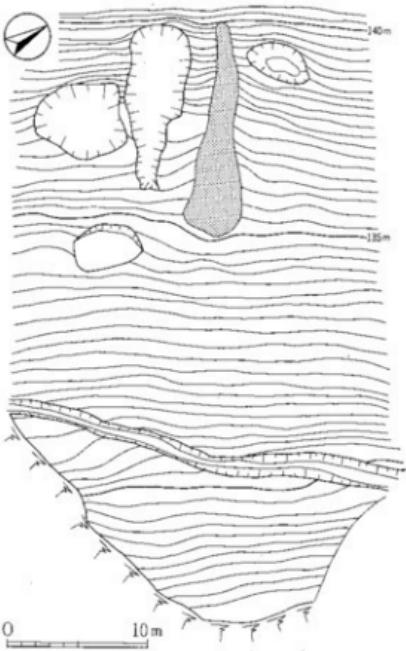
7号窯出土土器は、窯体・灰原共に全掘を行った結果、焼成の実態を把握する資料を提供している。実測可能個体数は299個体で、その内灰原から260個体、窯体及び窯体付近からは39個体検出されている。

器種別の構成を見ると、壺A・壺B・皿・高壺・稜輪・壺・甕・横瓶・平瓶・鉢などがあり、円面鏡も1点含まれている。

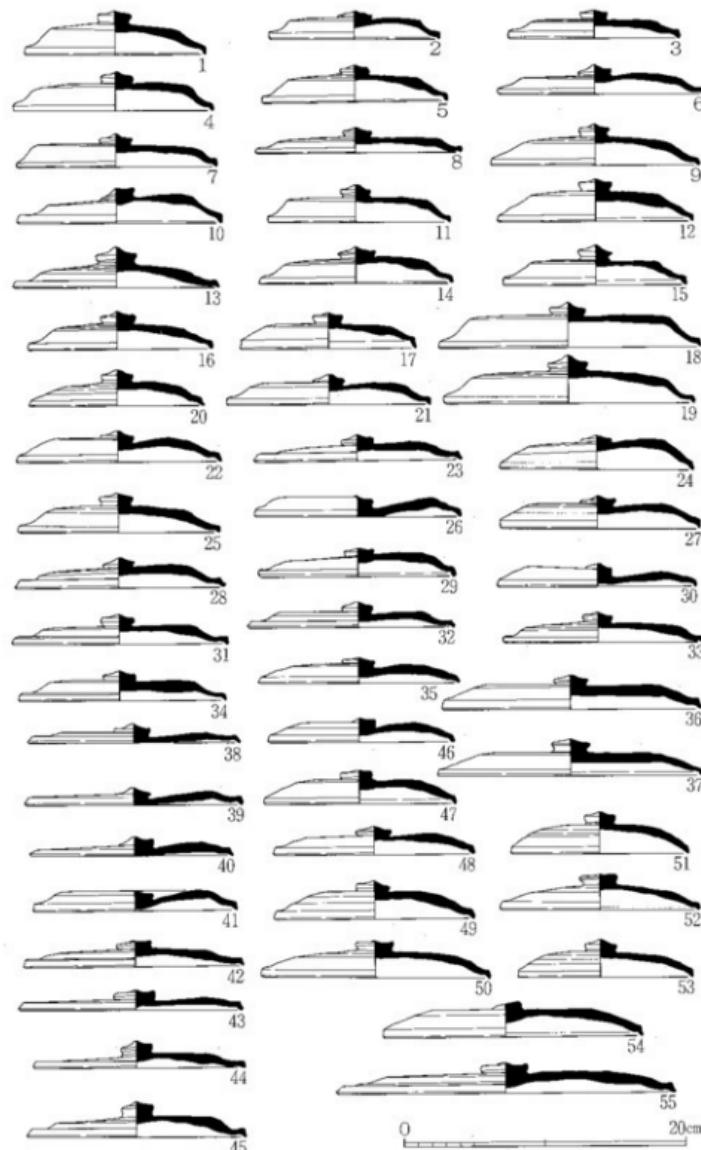
一般的に、壺・蓋・皿類を中心にして焼成が成されている窯であるが、特に長頸壺の焼成量の多さが目に付く窯跡である。

蓋（第10~11図1~76）

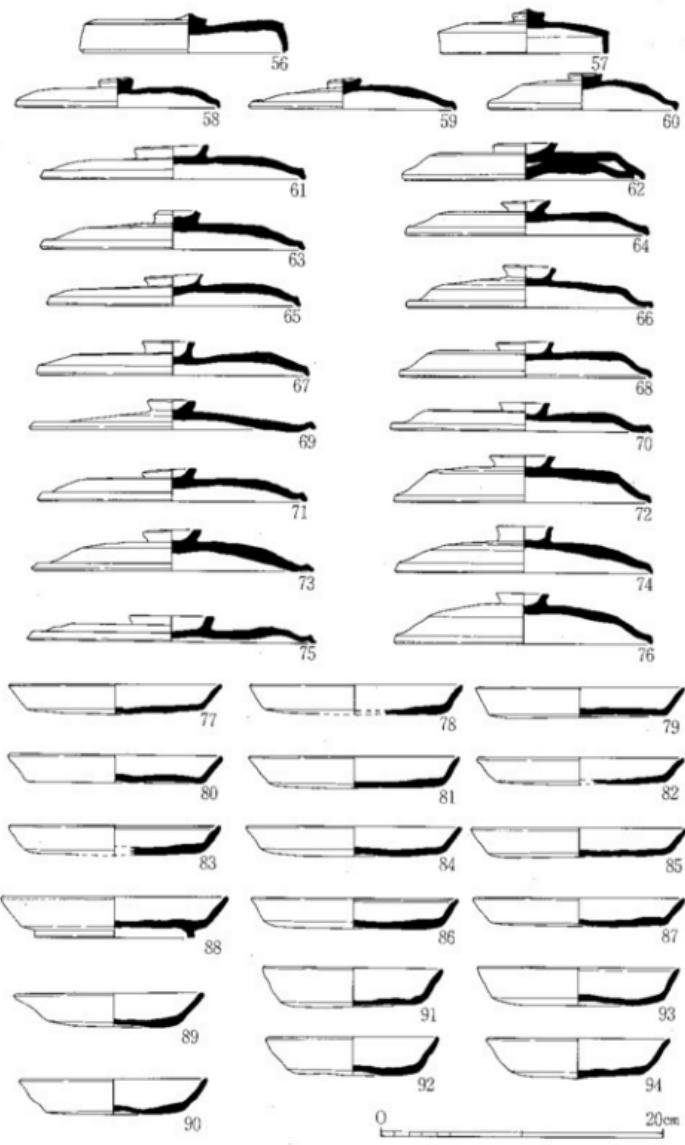
口径からは11cmから23cmまでのものが見られるが、14cm前後と18cm前後の2群に大きく分かれ、他に小形の12cm前後のものも散見できる。その中でも最も通有なのは14cm前後のものである。



第9図 7号窯地形図（調査後）



第10図 7号窯遺物(1)



第11図 7号窯遺物(2)

摘みからは、扁平で中央部の高いタイプと、輪状の大きなタイプが見られ、前者には更に、先端部の突出するもの（18ほか）も見られる。（56・57）は壺類の蓋と考えられ、口径で11cm前後と14cm前後のものが見られる。

輪状の摘みを持つタイプは、後述する稜腕の蓋となるもので、16個体分確認されており、口径は20cmを最大に、17～18cm前後のものが中心となっている。

形態的には、天井部から口縁部にかけて、緩やかに傾斜し、口縁端部が下方へ短く屈曲するタイプ（61・65・74）と、天井部と口縁部との境界に段をなし、端部が下方へ流れ、短く屈曲するタイプ（66・73・75など）に大きく区分されるが、後者が圧倒的に多く、更に口縁端部が丸く終るもの（66・72・76など）と、先端部に稜を持つもの（70・75など）が見られる。また、後者の中には、器高が低く、扁平なもの（69・71・75など）も比較的見られる。

皿（第11図77～88）

皿には高台の付くもの（88）が1点であるが見られ、付かないものと両者が存在する。口径は14～15cmのものばかりで一定している。

体部は、底部から口縁部が直線的に立つもの（79）と、口縁端部にかけて外反気味に立ち上がるものがあり、口縁部内面に沈線の見られるもの（83・86）も見られる。

（88）は高台の付くタイプで、断面四角形の高台が、底部外周よりやや内側に付き、外方に踏ん張って立つ。

全般的に底部は未調整であり、体部内外面はナデによる調整が見られる。

口縁端部は丸く仕上げられている。

坏A（第11図89～第12図135）

高台の付かない坏であり、口径は12～13cmの範囲で見られる。

口径はほぼ一定しているが、器高からは2種類のタイプに区分され、3cm以下のもの（89～94）と、3.5cm前後のものがある。

底部は平底のもの（91・100・102・103）も見られるが、全般的に底部中央の出っ張り気味のものが多く見られる。

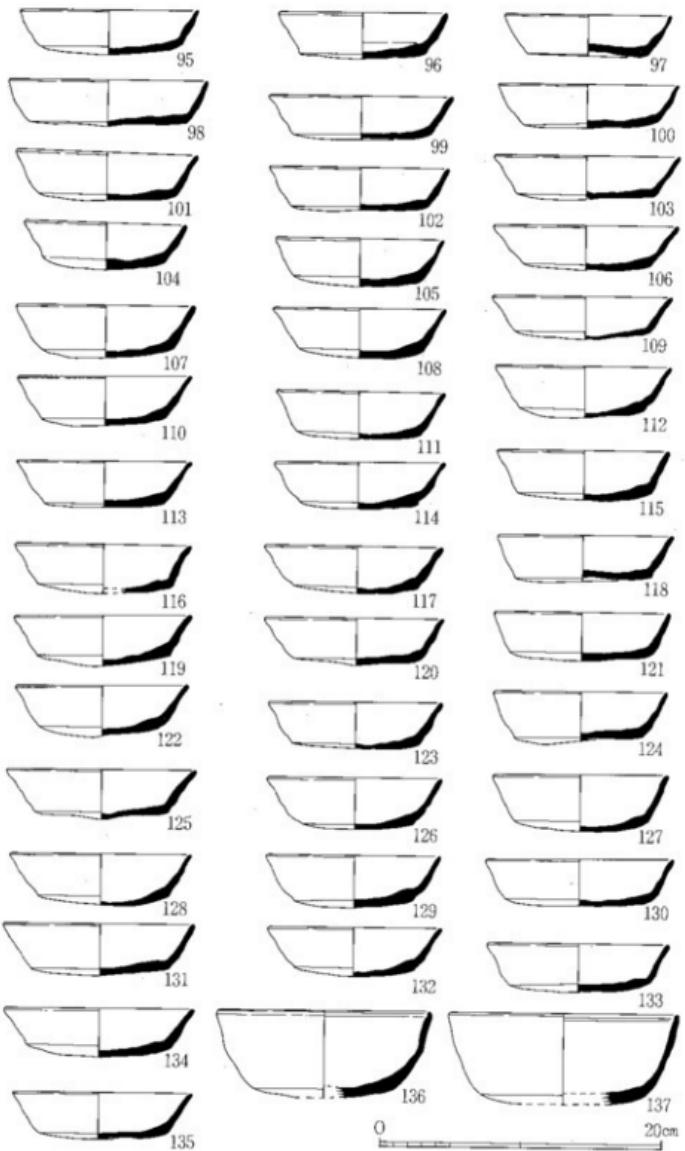
形態的には、底部から大きく外方に開く体部が、直線的に立ちあがり、口縁部端部付近で若干外反するものであり、一部に下肥れ気味に体部が外反するもの（108・111・126・132）が見られる。

口縁端部は全て丸く仕上げられており、先細り気味に終るものが多く見られる。

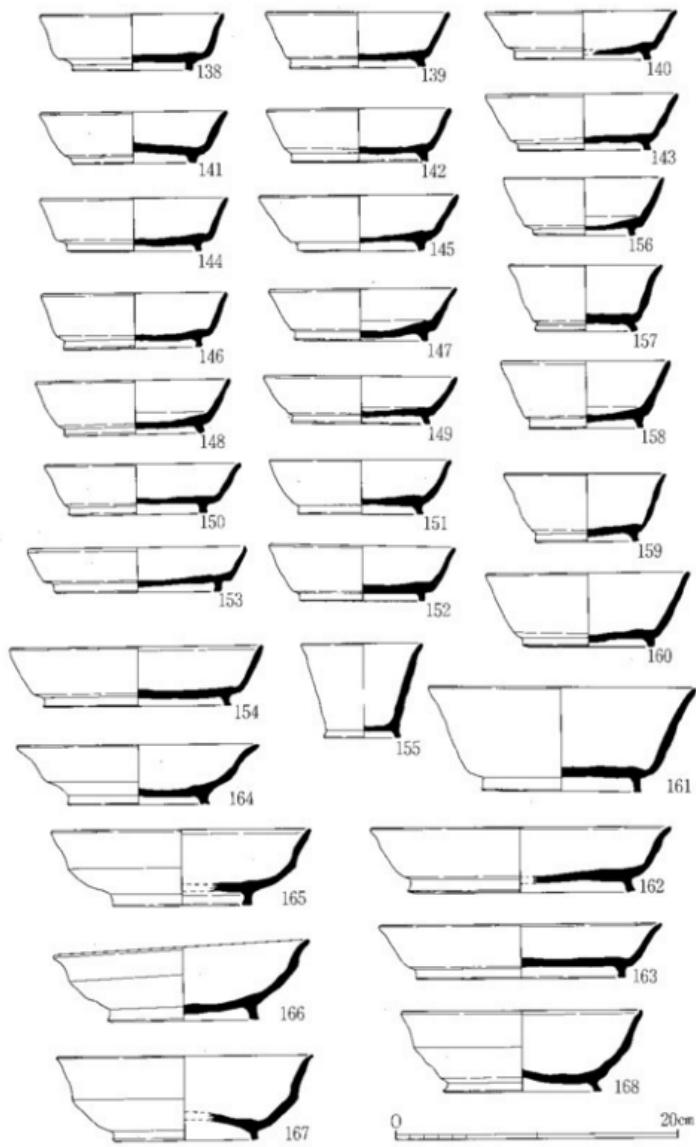
調整は底部ヘラ切り未調整で、内外面をナデによる調整が見られる。

坏B（第13図138～163、第14図169～178）

坏Bは高台の付く坏であり、坏Aに比べると、量は少ない。



第12図 7号窯遺物(3)



第13図 7号窯遺物(4)

坏Bに関して見ると、通有に見られるタイプと、器高の高いタイプ（155～161）とに大きく区分される。

前者は口径13cm前後、器高4cm弱のものを中心に、口径18cm前後のもの（154）や、20cm前後のもの（162・163）と、口径の大小で3種類程度見られる。

また、後者としては、前者が口径と器高の比率が1：3程度であったのに対し、1：2、5程度と高く、口径でも8cm前後の（155）を別にしても、11cm前後のもの（156～159）と、14cm前後のもの（160）、更には最大の18cmを越えるもの（161）が見られる。

形態的には、前者のタイプは体部が直線的だが、ごく僅かに内窓しつつ立ち上がるか、口縁端部で僅かに外反するもので、高台は断面四角形のものが、底部の外周付近に付くタイプであるが、一部に底部と体部の境界付近に高台の付くもの（142・151）も見られる。

口縁端部は丸く仕上げられているが、（153）のように、端部を内方に揃んで内傾するものも見られる。また、（154）は端部内面に沈線が施されている。

後者のタイプは、底部から直線的に体部が外反し、口縁部に至るもので、比較的細くて高い高台が、体部の延長上の底部に付く。

調整は両タイプ共に、底部はヘラ切り未調整、体部内外面はナデによる調整が見られる。

また、底部には「×」印のヘラ記号が多く見られるのも、一つの特徴と言えよう。

稜椀（第13図164～168、第14図180）

口径17～18cmを測り、大きく外反する体部が、体部に見られる稜から、口縁が更に外反するもので、稜は体部中央付近に見られるものを中心に、中央部やや下方のもの（164）や、やや上方のもの（166）も見られる。

高台は、細長い縦長のもので、ほぼ外方に踏ん張るが、（165）のように内方に立つものも見られる。

口縁端部は丸く仕上げられているが、端部内面に1条の沈線を施すもの（165）や、段のような状況を呈するもの（167・168）もある。

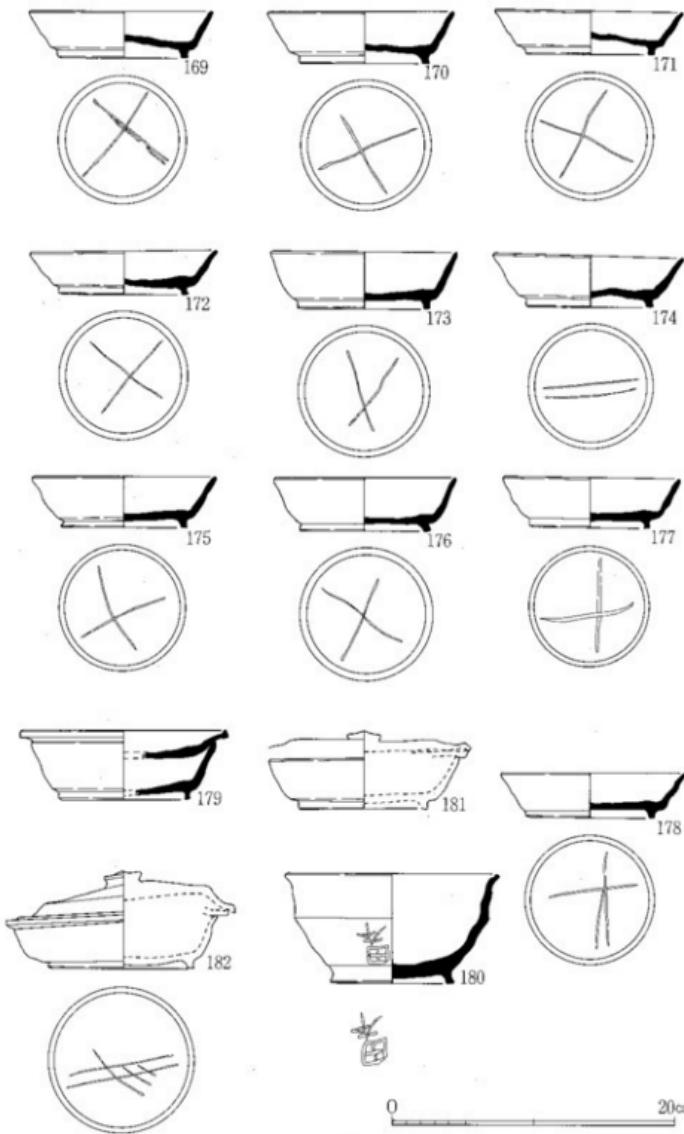
（180）は口径14.7cm、器高7.7cmの稜椀で、体部中央やや上方に稜を持つ。この土器は体部下方に「田本」のヘラによる文字状の印しを持つもので、器壁は厚い。

口縁端部内面は少し凹んで段状になり、縦長の高台は高く、外方に強く踏ん張る。体部下端付近にヘラ削りが見られる他、底部・体部内外面はナデによる調整が見られる。

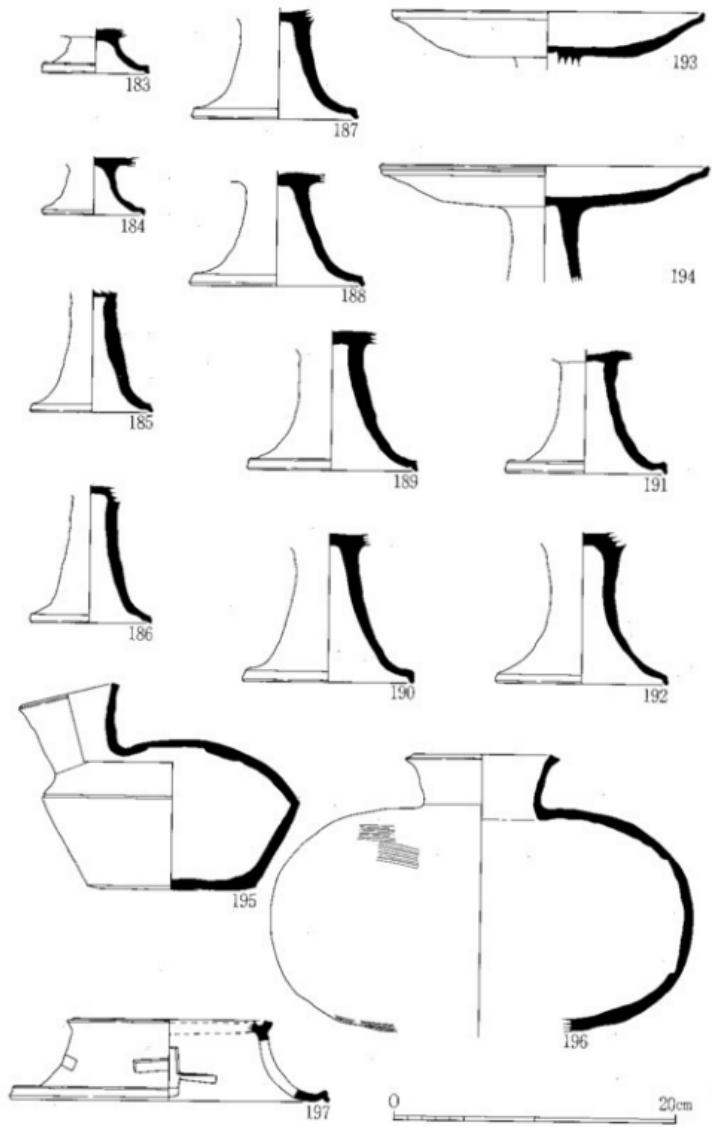
高坏（第15図183～194）

脚部破片と坏部破片の合計12個体の高坏が出土しているが、全容を知り得るものは一つも見られない。

脚部は低脚と長脚の両者が認められるが、長脚は更に、細長く円柱状で、裾部付近で大きく屈曲して端部となるもの（185・186）と、坏底部から緩やかに傾斜して屈曲するもの



第14図 7号窯遺物(5)



第15図 7号窯遺物(6)

(187~192) に区分される。

低脚は、短くて大きく外反する脚部を持ち、端部を垂直やや外方に屈曲するもので、面を持つもの (183) や、鈍い稜を持つもの (184) がある。

長脚は、脚端部を垂直やや下方に、摘み出して屈曲し、面を持つ。共に端部先端は丸く仕上げられている。

坏部は浅い坏部を持つタイプで、端部はやや外上方につまみ出されている。端部外面は面を持ち、沈線を1条持つもの (194) も見られる。一般的に坏蓋を逆転させた形態を想定させる。内外面共に、ナデによる調整が見られる。

壺 (第16図198~214、第17図215~223、第18図224~238、第19図239~253、第20図254~258、第21図)

壺としては、長頸壺・双耳壺・四耳壺・短頸壺が見られるが、なかでも長頸壺の出土量が圧倒的に多い。

長頸壺は、上方に緩やかなラッパ状となって開口口縁部を持つタイプで、口径は10cm前後を中心に、最小5.9cmのもの (243) や、最大11cmを越えるもの (218) などが見られる。

口縁端部は、外方に屈曲した後、上方に摘み上げられて延びる形態となっており、屈曲部分内面に凹状になるもの (215・233・234) も見られる。

口頸部から胴部にかけての特徴としては、沈線の施され方に、幾つかの変化が見られる。すなわち、(1) 口頸部に全く沈線の見られないもの、(2) 口頸部に1条の沈線が見られるもの、(3) 口頸部に2条ないし3条みられるもの。更に体部に目を移すと、(4) 頸部下方に1条の沈線を施すもの、(5) 肩部に1条の沈線を施すもの、(6) 肩部に2条の沈線を施すもの、(7) 頸部下方と肩部の両方に1~2条の沈線を施すものが見られ、口頸部に沈線の見られるものは、頸部、肩部に沈線を施す傾向が強い。

体部の形態は、胴部球形を基本としているが、やや肩の張るもの (219・220・222) なども見られる。

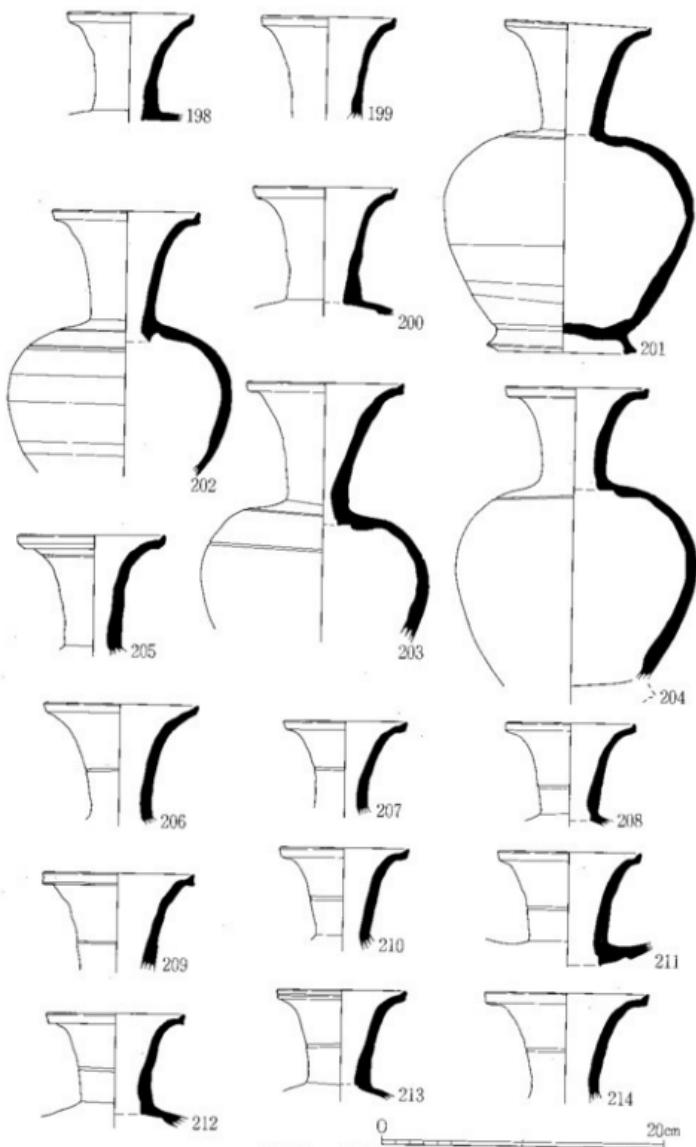
底部の伺える個体から判断すると、全て高台を持つと考えられ、断面四角あるいは台形の高台が外方に踏ん張って立つ。

また、全容を知ることのできる数個体から器高を考えると、全て21.5cm前後と見え、何らかの規格に合わせた制作が考えられる。

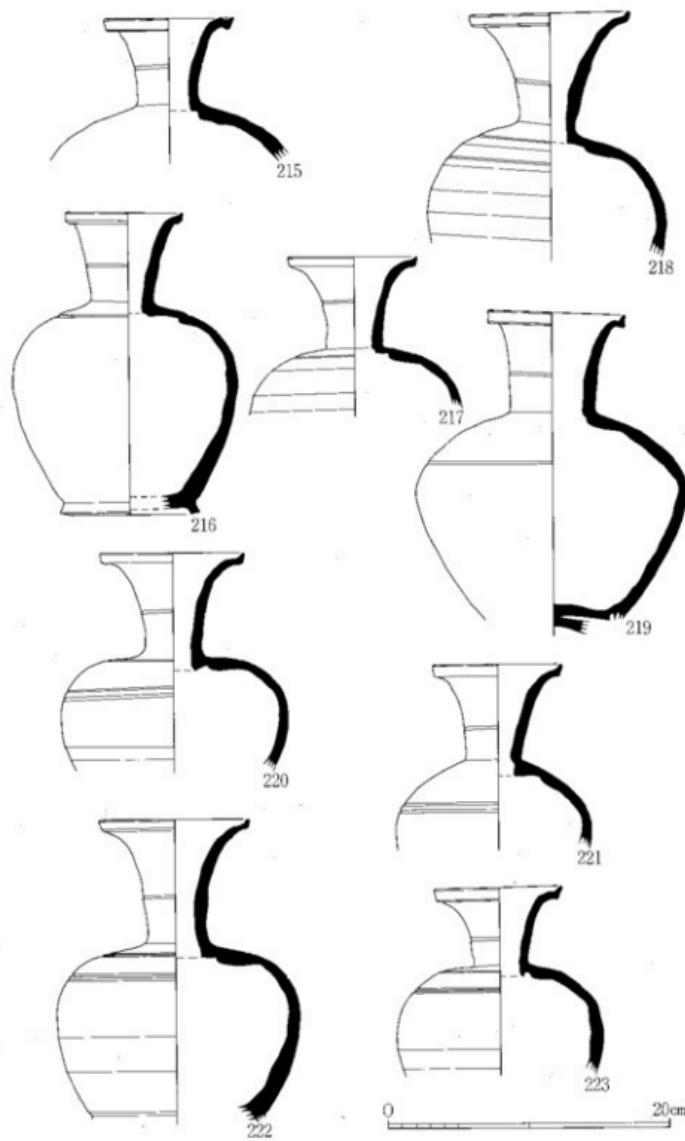
口頸部と体部は2段構成で、胴部下方にヘラケズリが見られる他は、ナデによる調整が施されている。

双耳壺は数量的には少なく、口径7~9cm前後の短い口縁が円筒状から外反して開く。

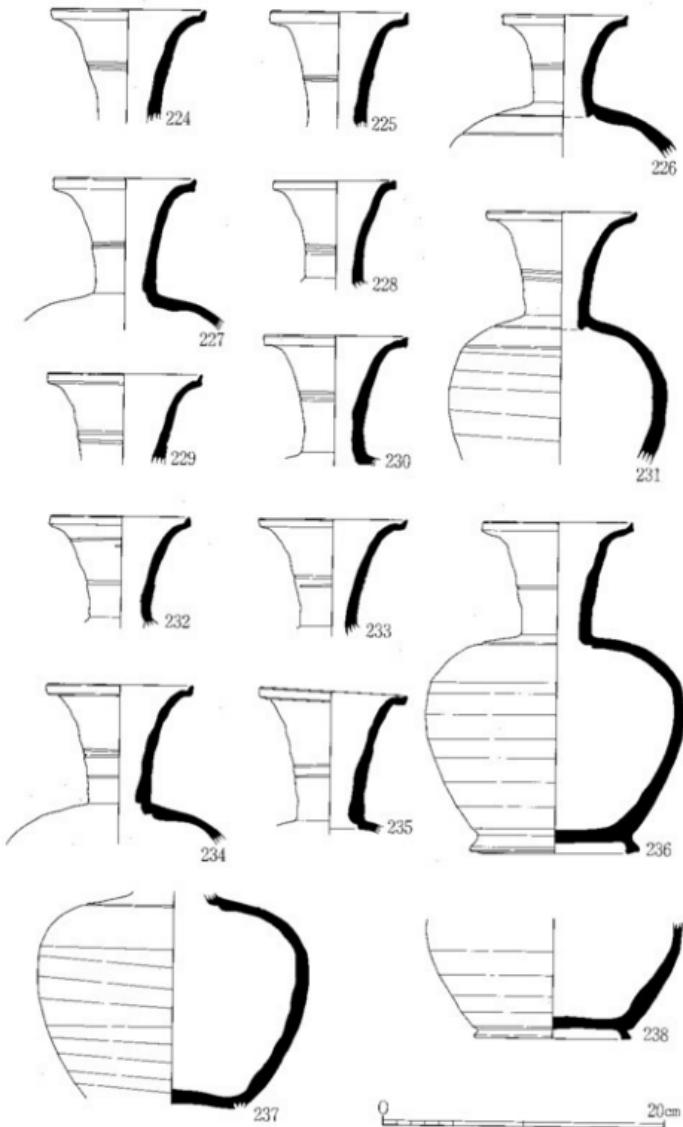
口縁端部は短く上方に摘み上げられ、鈍い稜を持つもの (242) や、上下に拡張されて面を持つもの (241) がある。口頸部には1条の沈線が施されている。



第16図 7号窯遺物(7)



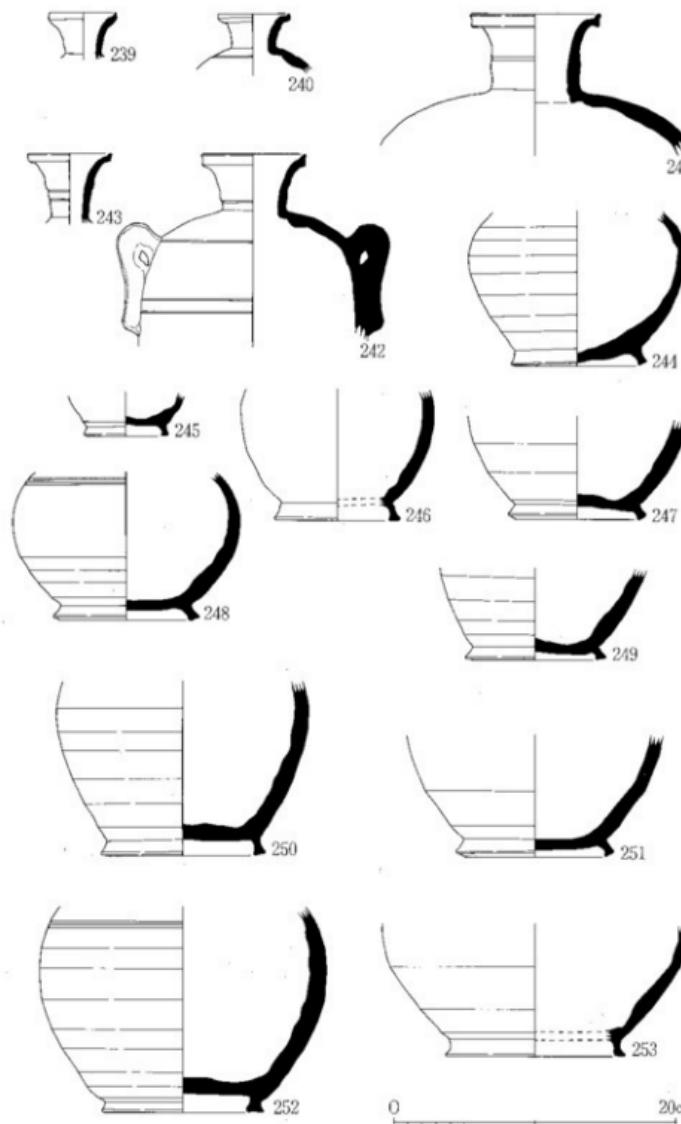
第17図 7号窯遺物(8)



第18図 7号窯遺物(9)

0

20cm



第19図 7号窯遺物(1)

体部は、なで肩で長胴状の形態で、縦長の大きな耳を両側に持つ。また、体部には、肩と胴部中央に1~2条の沈線が見られる。

全容を知りうる個体はなく、器高は不明と言わざるをえない。

四耳壺(277)は1点検出されている。肩の大きく張るもので、底部にかけて緩やかにしばむ。

口径11.4cmの口縁は短頭で、やや内方向に傾斜しており、端部は丸く仕上げられている。

耳は肩部上方に、やや縦長の耳が四方に付いており、断面台形で中央に円孔を1個穿っている。体部下半がヘラ削りの他、ナデによる調整がなされている。

短頸壺としては6個体(254~258・276)認められているが、その内(276)のみ全容を知ることができる。

(276)は口径15cm、器高21.3cmを測り、胴部中央に最大幅を持つ、胴の張った器形で、底部には、断面台形の高台が、外方に踏ん張って、内側に接して立つ。

短い口縁は外方に屈曲し、端部は丸く仕上げられている。

他の個体も、口径10~11cm前後のもので、口縁部は上方がやや外方に屈曲して立つ。

調整については、自然釉の為、不明確であるが、体部下半はヘラ削り、他はナデによるものと考えられる。

鉢(第12図136~137、第20図259~263)

鉢としては、大きく3種類のものが考えられる。(1)坏Aタイプの大型化したタイプのもの(136~137)と、(2)所胃鉢形のもの(259)と、(3)台形状を呈する、植木鉢形のもの(260~263)である。

(1)は口径15cm前後、器高6cm強を測るもので、平底から緩やかに口縁部がたつ。口縁端部は丸く仕上げられており、端部内面に1条の沈線が施されている。

底部の調整は不明であるが、他はナデによる調整が見られる。

(2)は口径18.4cmの鉢形を呈するもので、体部下半を欠き、全容は判明しないが、底部は尖底を呈すものと考える。

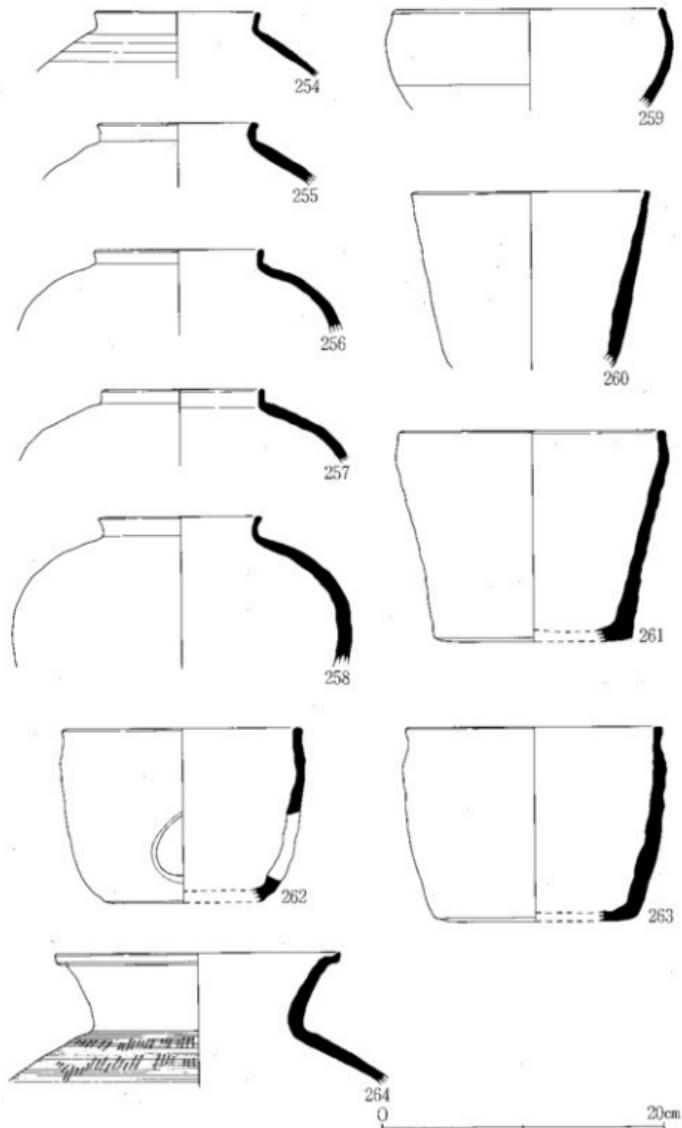
口縁端部は内傾気味で、丸く仕上げられている。

(3)は口径16~17cm前後、器高13~14cm前後を測る鉢である。

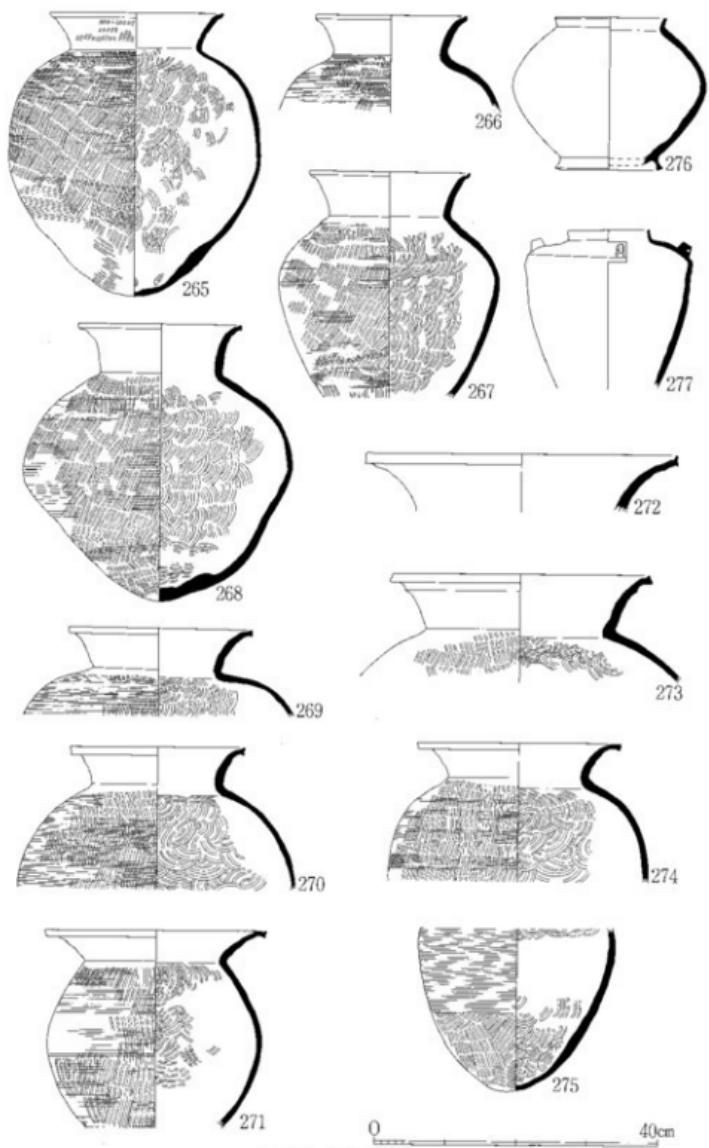
平底から直線的に立つもの(260)や、口縁や下方で内傾するもの(261)や、口縁直下が凹むもの(262~263)などバラエティーに富む。また、(262)のように円形の透しを穿つものもある。口縁端部は、全て鈍い面となっている。後世に見られる、窯道具としての「さや」的な形態を呈す。

平瓶(第15図195)

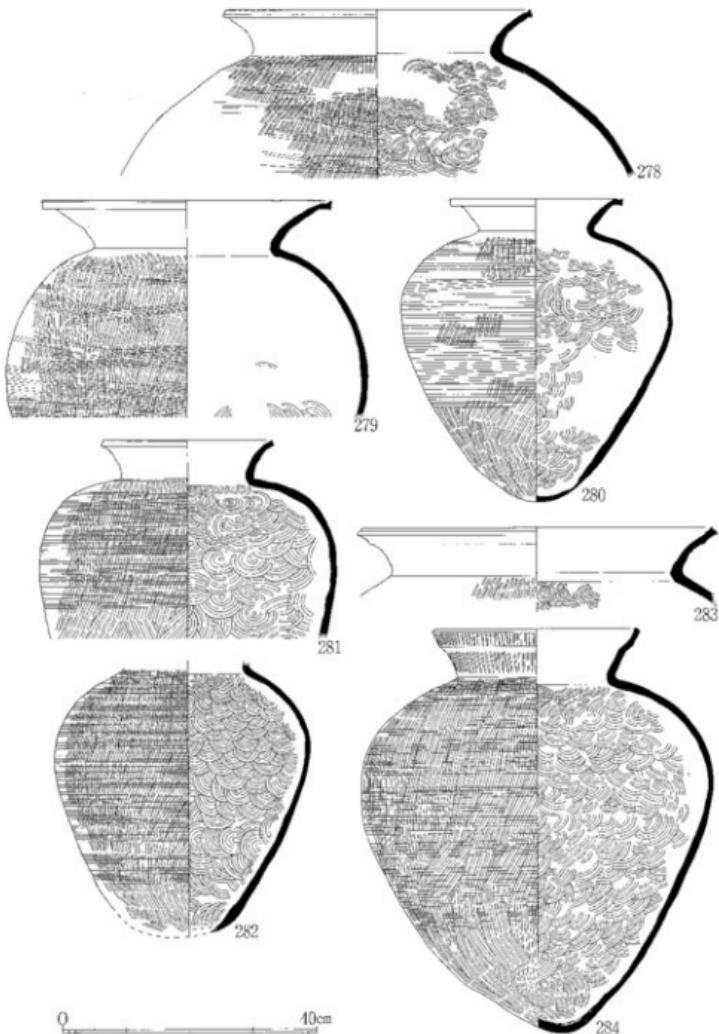
口径6.5cmのやや傾斜する口縁と、体部に稜角を持つ平瓶であり、稜角の直上に1条の沈



第20図 7号窯遺物⑩



第21図 7号窯遺物(1)



第22図 7号窯遺物(13)

線を施す。天井部には粘土円板の充填の跡が伺えるが、提梁は残存していない。

体部下半はヘラ削り、他はナデによる調整が見られる。底部に高台は見られない。

横瓶（第15図196）

丸味を持つ肩から、外反する短い口頭部を持つもので、口縁端部は外方向に延びる。

口径9.6cm、腹径29.9cmを測り、体部外面は平行タタキ目文にて調整されている。

円面鏡（第15図197）

碗部と台部が連續的に整形されたもので、海と陸の区別が明確に見られる。

台部の透しは、十字形で四方に見られるが、突帯は見られない。台部端部は緩やかに延びて屈曲し、外方に立つ。

甕（第20図264、第21図265～275、第22図）

甕は7号窯を中心に見られ、2号・8号窯では数点見られるのみである。

短い口縁部が大きく外反するタイプを中心、頸部が短く立って後、大きく口縁部が外反するもの（266～268）があり、大部分は口縁端部が上方につまみ上げられる。

口径は25cm前後のものが多く見られるが、大きなものは54～55cmのもの（283）や、30cm代のもの（273・284）や、40cm代のもの（272・278～279）まで豊富に見られる。

また口縁直下に鈍い突帯を持つもの（273・283）や、外反する口縁に稜を持って区別し、両側にタタキ目文を施すもの（284）などが見られる。体部の形態は、球形に近いものか、卵形を呈し、底部は尖り気味の丸底を呈す。

体部内面は同心円文か、同心円文を施した後、ナデによって消している。外面はタタキ目文を施した後、カキ目による調整が見られる。器高は全容を知り得るものが少ないので、（265）が39.7cm、（268）が39cm、（284）が62.9cmとなっている。

第4節 8号窯

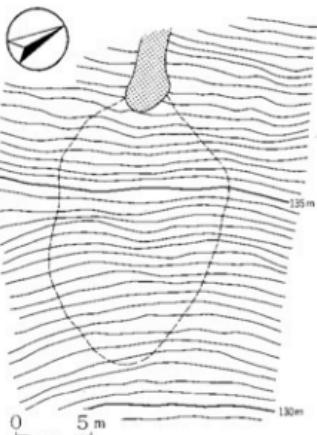
1. 窯体の構造

8号窯は調査の結果、道路計画地内に窯体の1部と、灰原の全体が含まれていた。

調査が路線内に限られた為、窯体は下方部2.2mの部分のみとした。

窯は半地下水式の窯窓で、床面には多くの土器が残存していた。

窯体の幅は、焚口で1.3m、調査地上端部で1.2mを測る。



第23図 8号窯地形図（調査後）

側壁は焚口で0.3m、調査地上端で0.5m残存する。

前部は1.5m程の不整円形を呈し、中央及び左側端に0.4~0.5mのピットを持ち、焚口部とは少し段を持って下がる。

床面の傾斜は9°と緩やかで、窯体主軸の方位はN49°Wである。

断ち割り調査の結果、床面は1枚であるが、側壁に補修の痕が認められ、調査を実施した範囲内でも数回の操業が考えられる。

今回調査を実施した窯の中では、最も大きな窯と考えられる。

灰原は急傾斜地に広範囲に拡がっているが、灰層の堆積は厚くない。

2. 遺物

8号窯出土土器は、窯体・灰原を含めて、実測可能個体数は284個体である。その内で、窯体出土は56個体あり、残り228個体は灰原の出土である。

器種別構成としては、壺A・壺B・蓋・皿・高壺・稜挽・壺・甕・横瓶・平瓶・鉢などが見られ、特殊なものとしては、土錘・円面鏡・綠釉陶器などが見られる。

なお、綠釉土器は小破片であり、灰原の暗黄褐色土中からの出土であり、当窯跡の焼成品とは考えがたいと思われる。

蓋（第25図1~64）

口径で11.4cm(57)から19cm(63)までのものが見られるが、大きさは12cm前後・14cm前後・18cm前後の3種類に区分される。中でも14cm前後のものが圧倒的に多く見られる。

摘みは扁平で中央部の高いタイプと、輪状のタイプとに大きく区分されるが、前者は更に、先端部の尖がるもの（6~9ほか）と、通常のタイプに分かれる。また、後者は径4~5cmの輪状のもので、稜挽の蓋と考えられる。他に円柱状で、中央部の凹むもの（58）も見られる。

(13・14)は壺類の蓋と考えられ、口径は13.6cmを測る。

形態的には、天井部から口縁にかけて、緩やかに傾斜し、口縁端部が下方に短く屈曲するタイプ（1・3ほか）と、天井部と口縁部との境界に段をなし、端部が下方へ短く屈曲するタイプ（6・9ほか）に大きく区分されるが、後者には、更に天井部の極端に低いものの（36・43・45）などが見られる。

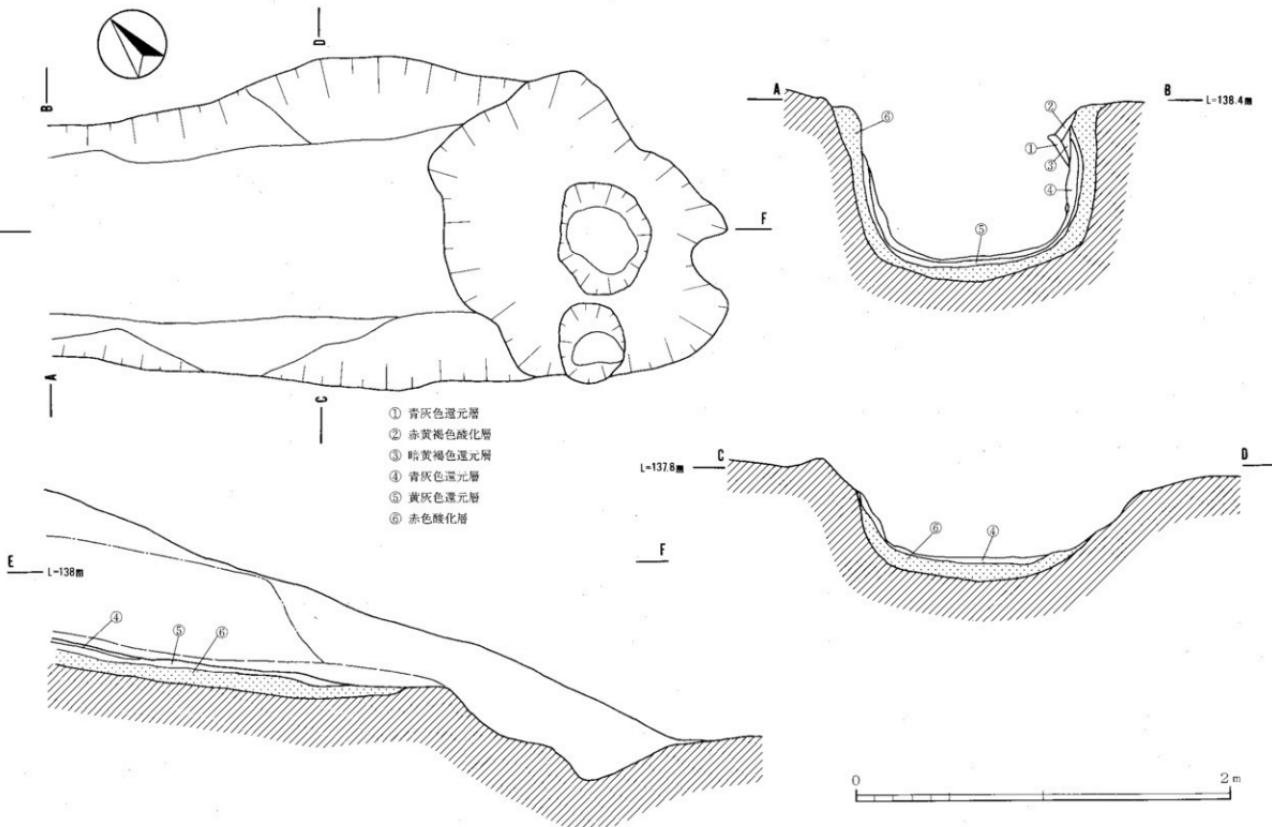
また、口縁端部先端は、丸く仕上げられているものが多く見られるが、鈍い稜を持つもの（2・30ほか）も見られる。

なお、1~14は床面直上出土の土器である。

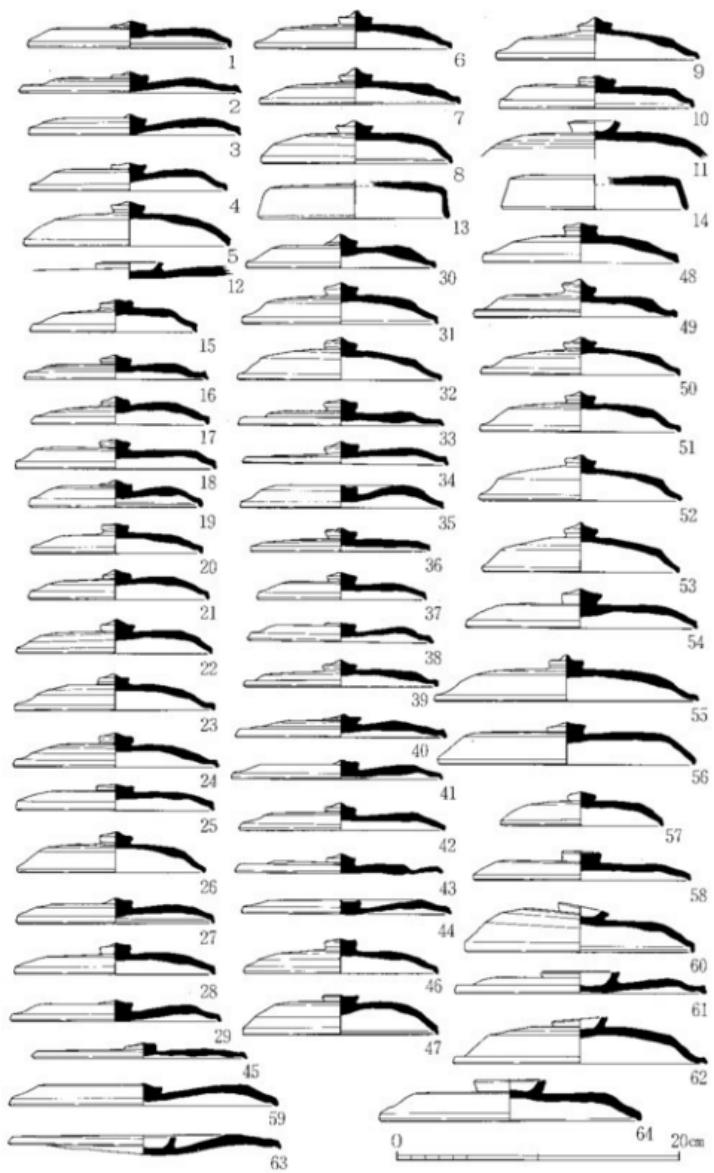
皿（第26図65~99）

8号窯出土の皿は、全て高台の付かないタイプであり、口径は14~15cm前後である。

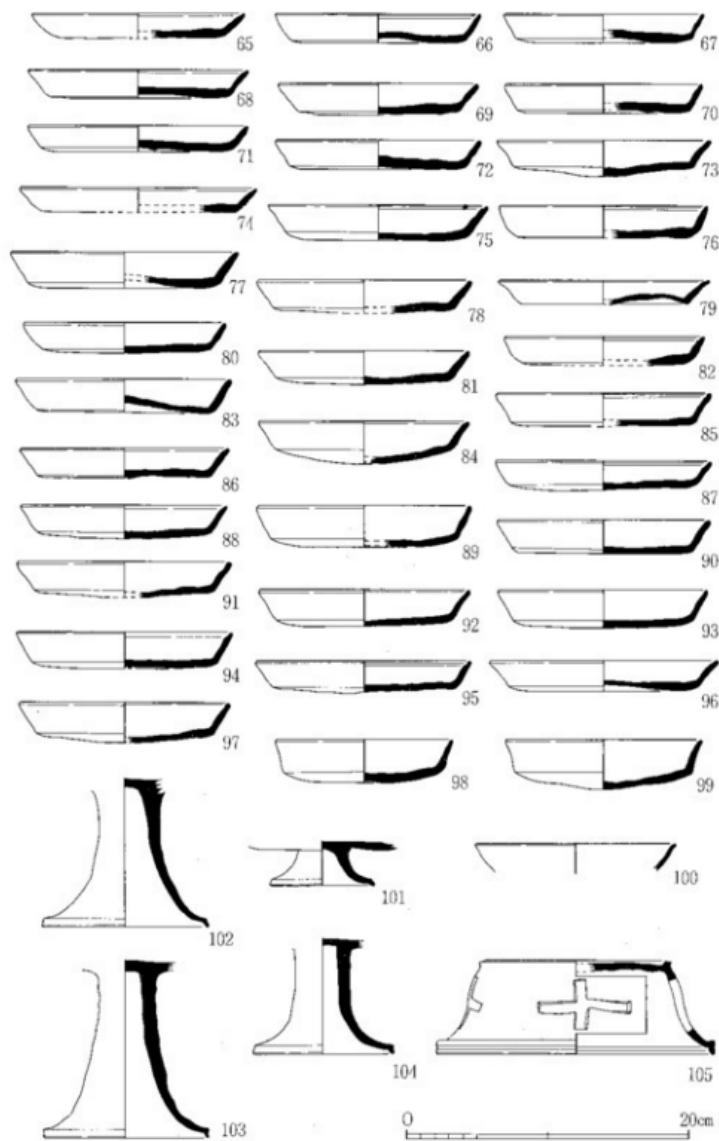
体部は、底部から直線的に口縁部が立つものと、口縁端部にかけて、外反気味に立ち上



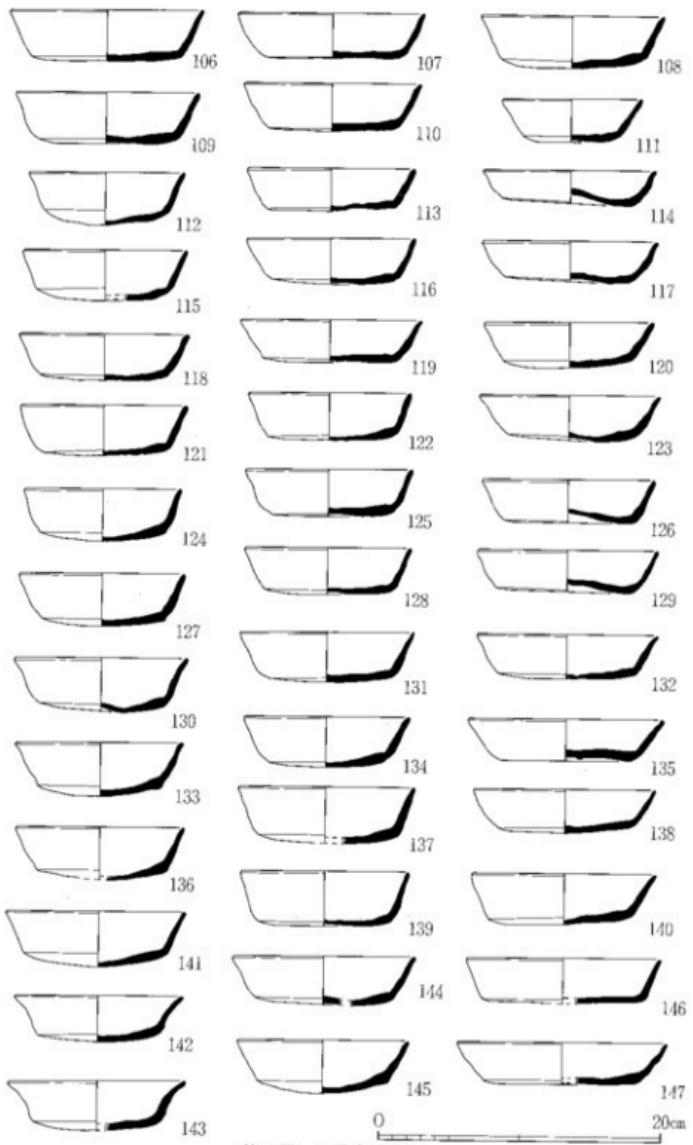
第24図 8号窓実測図



第25図 8号窯遺物(1)



第26図 8号窯遺物(2)



第27図 8号窯遺物(3)

がるものと見られるが、後者の方が数量的には多い。

口縁端部は丸く仕上げられているが、内面に沈線の見られるもの（65・66など）が13個体ある。

底部はヘラ切り未調整のままであるが、平底とならないもの（73・84など）も見られる。体部は内外面ともナデによる調整である。

环A（第27図106～147）

口径12～13cm前後のものがほとんどであるが、(111)のように10cmに満たないものも見られる。

形態的には、底部から大きく外方に開く口縁を持ち、口縁が直線的か、口縁端部付近で若干外反気味に立つものが中心であるが、(142～143)のように、少し尖り気味の底部から、口縁中央部付近で大きく屈曲して外反するものも見られる。また、(139)のような、体部のあまり外反しないタイプもあり、形態的にはバラエティーに富んでいる。

口縁端部は丸く仕上げられており、先端が細くなっているものも多い。

底部はヘラ切り未調整で、他はナデによる調整が見られる。

环B（第28図148～184）

环Aに高台の付いた器形であり、口径では12cm、14cm、18cm前後の3種類に、大きく区分される。

形態的には、环Aと同様、底部から直線的かやや外反気味に、口縁が延びるタイプである。

器高は4cm前後を中心に見られるが、7号窯で顕著に見られた、器高の高いタイプのもの（151・166・176）も存在し、器高は5cm近くにも達する。

高台は断面四角形のものが、底部の外周付近に付くが、器高の高いタイプ程、体部の延長上に近い底部に高台が付く。

底部の調整はヘラ切り未調整、その他はナデによる調整が見られる。

稜梳（第28図185～187、第29図188～194）

口径18cm前後を中心に、15～16cmのもの（187・188）も見られる。

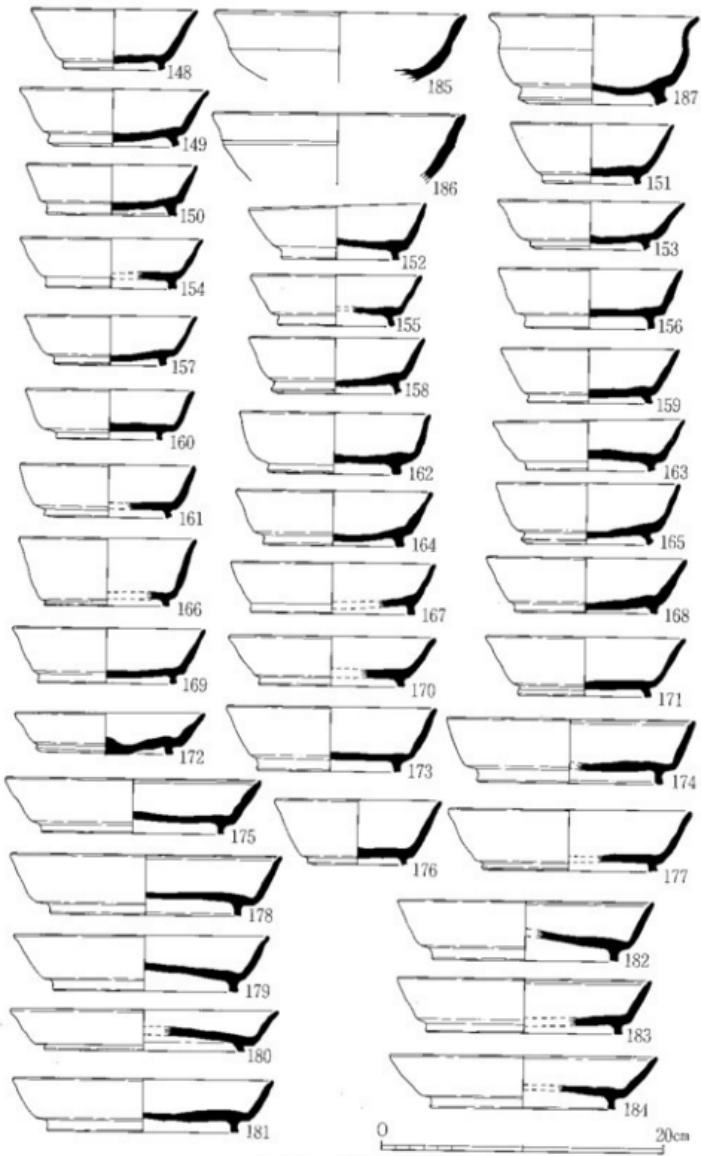
大きく外反する体部が、体部中央付近に見られる稜から、更に大きく外反するもので、ほとんどが体部中央か、やや上方に稜を持つが、(186)のように、1条の沈線を持つものも見られる。

口縁端部は丸く仕上げられているが、全て端部内面に1条の沈線状の凹みを持つ。

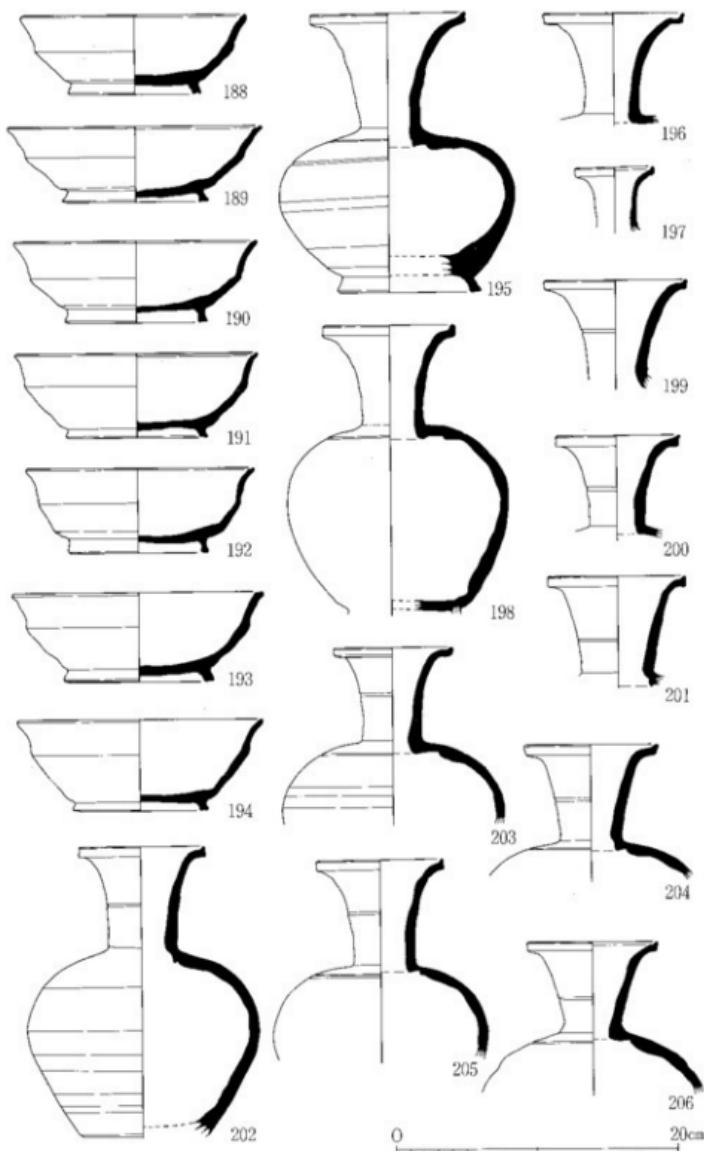
高台は細長い綫長のもので、ほぼ外方に踏ん張って立つ。

高坏（第26図101～104）

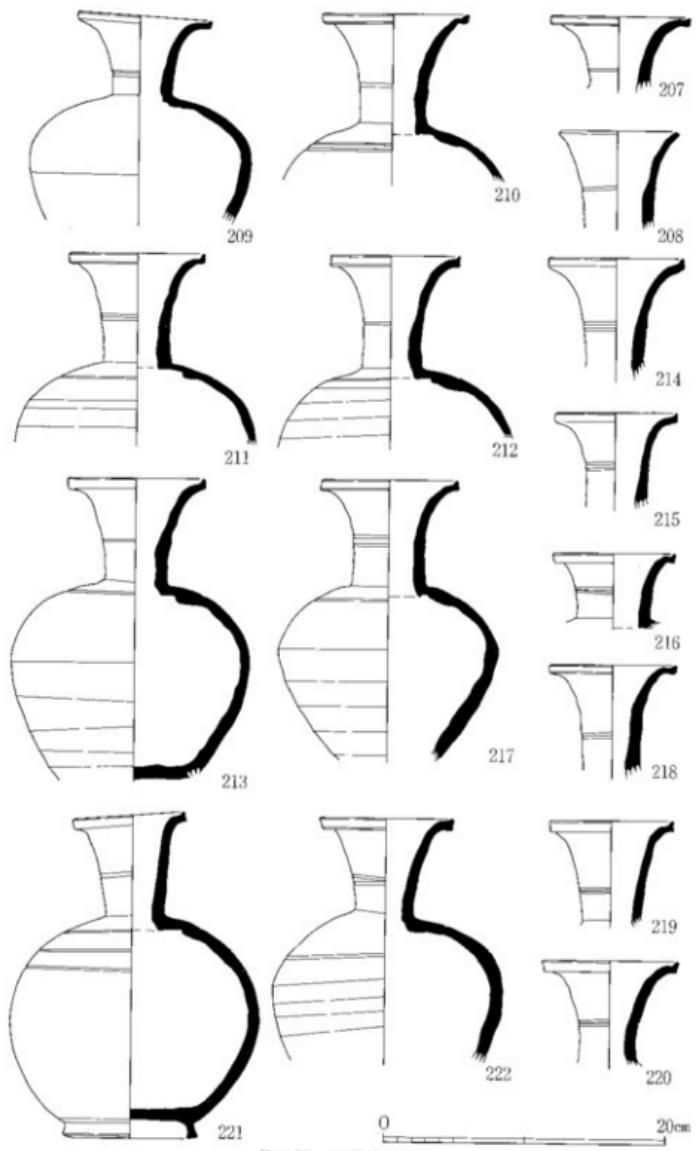
高坏は低脚・長脚の両方見られるが、共に脚部のみの破片である。



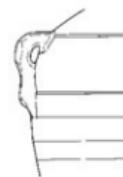
第28図 B号窯遺物(4)



第28図 8号窯遺物(5)

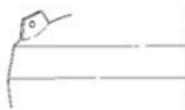


第30図 8号窯遺物(6)



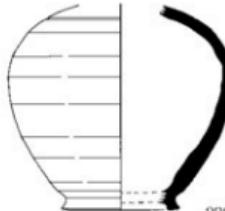
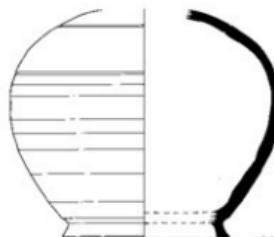
224

223



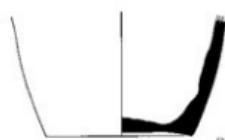
226

225



228

227



230

229

0

20cm

第31図 8号窯遺物(7)

低脚(101)は、短く大きく外反する脚部で、端部は小さく下方に屈曲する。先端は丸く仕上げられており、屈曲部は面となる。

長脚は、坏底部から緩やかに屈曲して、垂直かやや外方に延びて立つもの(102・103)と、坏底部から円柱状に延び、裾部で大きく外反するもの(104)の両者が見られる。内外面共にナデによる調整が見られる。

縁輪 (第26図100)

椀の形態を呈する口縁部小破片である。口径推定14cmで、先端は丸く仕上げられている。オリーブ色を呈す。

壺 (第29図195～206、第30図～第32図239)

壺としては、長頸壺・二耳壺・短頸壺・無頸壺などが見られる。7号窯同様、長頸壺の出土量が圧倒的に多い。

長頸壺は、口径8～10cm前後で、外上方にラッパ状に開く口縁部を持つ。

口縁端部は全て、屈曲して上方に摘み上げられており、底部には全て縦長の高台が付くものと考える。

(208)は口縁端部が開いたまま、丸く仕上げられており、所謂水瓶の口縁かと思われる。

体部の沈線は、7号窯で見られたと同様の状況を呈しており、沈線の施文方法に一定のルールが伺える。

器高は大小見られ、20cmに満たないもの(195)と、23cm前後のもの(221)が見られるが、体部はほぼ球形に近い形態を呈す。

口頸部と体部は2段構成で、胴部下方にヘラ削りを、他はナデによる調整が見られる。

双耳壺は、なで肩から緩やかに底部に至る器形で、胴部は長胴風である。

耳は肩部やや下方に、縦長の耳が付くもので、耳付近に沈線を1～2条施す。底部は平底を呈す。

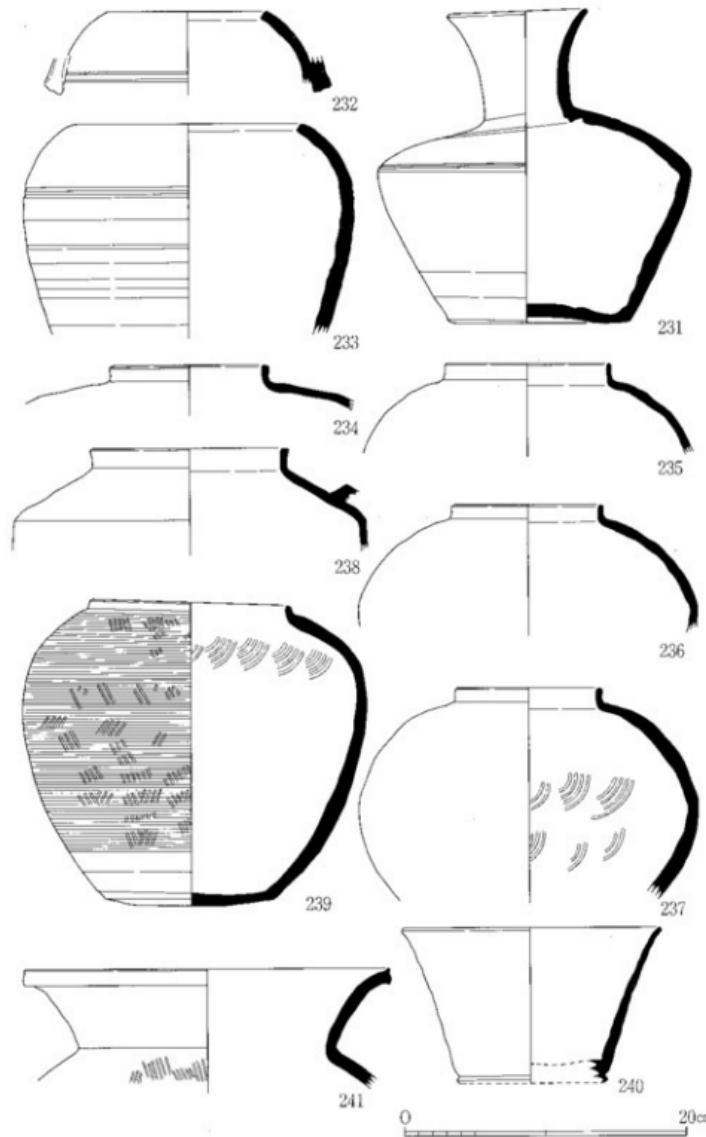
(225)は7号窯の類例からすると、四耳壺と考えられる。断面台形の耳が肩部上方に付くもので、中央に円孔を穿つ。

(234・238)も同様の壺と考えられ、上方かやや外方に開いて立つ、短い口縁を有する。短頸壺は口径10～11cm前後で、口縁は短く垂直かやや内側に向って立つ。(239)は全容の判るもので、口径13.8cm、器高21.3cmを測る。

底部は平底で、外面は斜方向のタタキ目を施した後、カキ目調整を、内面は同心円文の後、ナデにて消している。体部は球形か丸味を持った形態を呈す。

無頸壺は2点出土している。(232)は口径11.2cmを測り、肩部やや下方に、縦長の耳を持つ。また、耳の部分に2条の沈線を施す。

(233)は口径15.9cmを測り、肩部付近から胴部にかけて、数条の沈線を施す。耳を持つ



第32図 8号窯遺物(6)

かどうかは、破片の関係からは不明確である。

胸部下半はヘラ削り、他はナデによる調整が見られる。

鉢（第32図240）

底部から大きくラッパ状に開く口縁を持つもので、口径18.2cm、器高11cmを測る。口縁は端部に行く程、薄くなり、先端は丸く仕上げられている。

平瓶（第31図226）

口径6.1cmのやや傾斜する口縁を持つ縦長の平瓶であり、器高23.6cmを測る。天井部には粘土円板の充填の跡が伺える。珍らしい器形である。

体部下半はヘラ削り、他はナデによる調整であり、(216)はこののようなタイプの口縁かも知れない。底部は平底である。

円面鏡（第26図105）

海と陸の明確に区別されるもので、台部に「十」字形の透しが、四方に穿される。

台部裾は緩やかに開き、端部は垂直に立って、面をなす。端部の面には沈線が巡る。

甕（第32図241）

口径26cmを測る。短い口縁部が大きく外反し、端部を上方に摘み上げている。

口縁部はナデによる調整で、体部外面はタクキ目、内面は同心円文の後、ナデにて消す調整が施されている。

第5節 9号窯

1. 調査の概要

9号窯については、分布調査の結果からも、当然の如く、路線内に窯体・灰原が位置しているものと考え、調査対象として実施することとなった。

しかし、表土掘削を開始し始めて見ると、灰原としての灰層等が認められず、更に路線よりも上方に位置している可能性が強くなってきた為、路線上端際にトレンチを設定し、トレンチによる確認を実施することにした。

トレンチは合計4本で、幅2mで設定し、掘下げた結果、各トレンチ共、表土、暗黄褐色土、地山の土層堆積が見られ、灰原・窯体は路線内に存在していないことも判明した。

7・8・9号窯は上牧谷の西斜面に見られる小支谷に挟まれた場所に、3基存在し、7から8・9号窯にかけて、標高が高い位置に立地しており、路線内には、7号窯が全部、8号窯が灰原と窯体の一部、9号窯が全く存在しない状態であった。

なお、トレンチ調査にて、第2トレンチより直口壺の口縁付近の破片が1点出土しており、上方部の踏査等により、一応9号窯の窯体・灰原の存在するであろう場所は把握している。

「参考文献」

- 田辺昭三「陶邑古窯跡群」 I 平安学園 1966年
奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」 I 1976年
奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」 II 1978年
奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」 VII 1976年
大阪府教育委員会「陶邑」 IV 1979年
市島町「丹波三ツ塚遺跡 I」 1973年
市島町「丹波三ツ塚遺跡 II」 1975年
市島町「丹波三ツ塚遺跡 III」 1981年
兵庫県教育委員会「松ノ本古墳群」 1985年
兵庫県教育委員会「多利向山古墳群」 1986年
兵庫県教育委員会「多利遺跡群発掘調査報告」 1987年
兵庫県教育委員会「国領遺跡現地説明会のしおり」 1987年
市島町「久良部 1号墳」 1987年
春日町「野々間遺跡」 1990年
兵庫県教育委員会「山垣遺跡」 1990年
兵庫県教育委員会「七日市遺跡(I)」 1990年・1991年
兵庫県教育委員会「七日市遺跡(II)」 1991年
余田邦夫「丹波春日町出土の磨製石剣」考古学雑誌第54巻4号 1969年
樋本誠一・瀬戸谷皓「日本の古代遺跡 兵庫北部」 1982年
種定淳介「丹波・中山窯跡出土の須恵器」中世土器の基礎研究V 1989年

第4章 まとめ

今回調査を実施した窯跡は3基であり、窯体に関しては、2号窯が前庭部付近を欠いているものの、ほぼ全容を知ることができ、7号窯は全て残存しており、8号窯は遺構としては、完存しているものの、路線内には窯体の一部が含まれるのみで、他は路線外であった為、調査は路線内にのみ限られた。

窯体の規模としては、8号窯の全長は不明であるが、2号窯が4m前後、7号窯が8m強と、大きく差異が見られ、2号窯は7号窯の約半分程度となっている。

しかし、窯体の幅は両者共1.2m前後と同様の規模を示し、調査範囲内での8号窯体の幅もほぼ同様となっている。

一般的に同時期の窯を見ると、全長7~8m、幅1~1.7mのものが中心であり、当窯跡群の7号窯が一般的な規模を示している。

しかし、幅に関しては、少し狭い部類に入り、7号窯は細長い形態のものと考えられる。

ここで、2号窯のように全長の短い形態の窯が、一般的ではないのかと考えると、あまり調査例のない丹波・有馬郡周辺の例を持って考えてみると、三田市末古窯跡群の中で、^(註1)青野ダム建設に伴って調査の実施された、地福窯跡がほぼ近い時期の窯跡として参考となるであろう。

地福窯跡は、40m程度の同一傾斜地内に、合計6基の窯跡が築かれていたものであり、規模から言えば、7~8m前後のもの3基、4~5m前後のもの3基から構成されている。

この窯跡群の調査から想定されるのは、4~5mと7~8mの窯が一対で同時存在していたのではなかろうかと言うことで、大・小2基の窯がセットで3時期見られる。

また、大小の窯跡について、片方が小型品の焼成のみの場合、他方が大型品も焼成している状況が伺える。

この場合、当窯跡での2号・7号・8号窯のあり方を考えると、2号窯は灰原が調査されていないものの、小型品のみ焼成、7号窯が小型・大型両方焼成、8号窯も両方焼成されている状況が合致する。

窯体の施設と言う点では、2号、7号共に、焼成部先端付近に、階段状のテラスが数段見られ、焼き台的な土器片も見られ、共通性が伺える。また、焚口・前庭部付近に舟底状ピットや凹地が存在するのも共通する事柄の一つであろう。

窯体床面の観察からは、全て一枚と考えられるが、側壁部分の観察では、7・8号窯にて補修痕が認められ、1度のみの焼成で終っていない事が知られる。

遺物からは、窯にて焼成されているのは、全て須恵器であり、瓦類その他は見られない

が、8号窯灰原付近で検出されたものの中に、綠釉境の口縁小破片が存在する。

全ての窯に共通して見られる器種としては、蓋・坏A・坏B・皿・長頸壺であり、この時期に一般的な小型器種としての蓋・坏A・坏B・皿の小型供膳形態品中心の焼成が行われている。

中心となる小型供膳形態品以外の器種を考えると、全ての窯に於いて長頸壺の出土量が目を見張り、7号窯にて見られる量の多さは特に注目され、8号窯出土の長頸壺についても同様、他の器種に比べると多い。

その他注目される器種としては、高坏・短頸壺・稜塊などがあり、高坏に見られる、長脚・短脚の2種の内、長脚の量的豊富さも注目されよう。

短頸壺は7号窯にて見られる、球形の胴部を持つものと、8号窯に見られる肩の張った双耳壺の両者があり、前者のタイプが主流であろう。双耳壺の耳には、紐状巻長タイプと小円孔を穿つものが存在し、7号・8号共に両者が見られる。

稜塊は7号・8号共に数量的に多く存在し、この窯跡群で多く焼成された器種の一種と思われる。また、2号窯の蓋に、稜塊に付随するものが見られることから、存在も充分に考えられる。

特殊な器形としては、円面鏡・土錘があり、円面鏡の透しは長方形ではなく、十字形のものである。

甕は大きく外反するタイプを中心で、体部は外面がタタキ目の後に、カキ目を施すもの、内面は同心円文の後、ナデ消しが多い。

時期的には、蓋の口縁部端部から、A形態を中心に、1部にB形態のものが見られる。

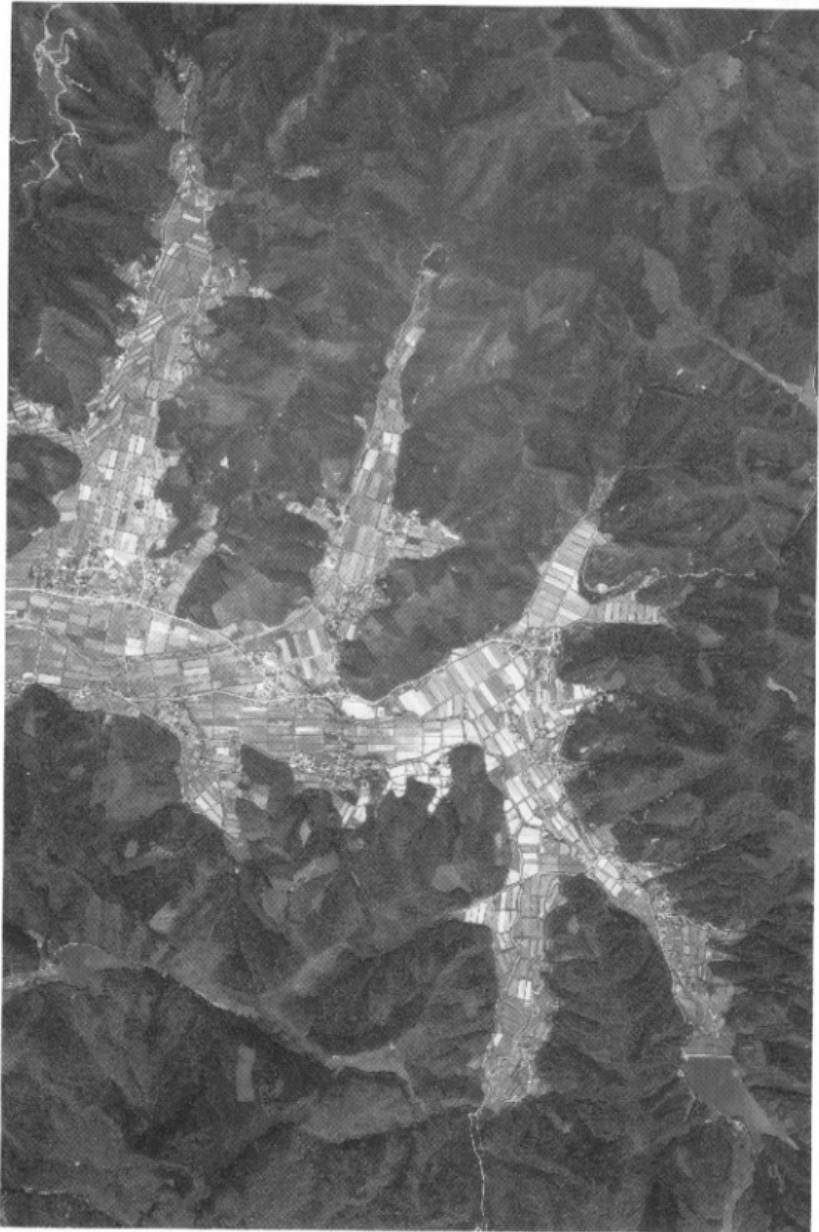
長頸壺からは、球形の胴部に、上方に延びる口縁端部が中心であり、ほとんど全てに高台を持つ。

坏B・皿などの調整はヘラ切り未調整が多く、口縁部の体部からの立ち上がりも、直線的かやや外反的に立つなど後進的な要素が多く見られ、2・7・8号窯には、多少の変化は見られるものの、編年的には大差なく、全て、8世紀後半から末に近い時期にあてはまり、^{即ち}平城編年の平城Vに近い時期と考える。

また、窯体床直で同時に出土している蓋の形態に、A・B両形態が見られることも注目される要素として指摘できる。

註1. 兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)」1988年

2. 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」VII 奈良国立文化財研究所学報 第26冊 1976年



遺跡周辺航空写真



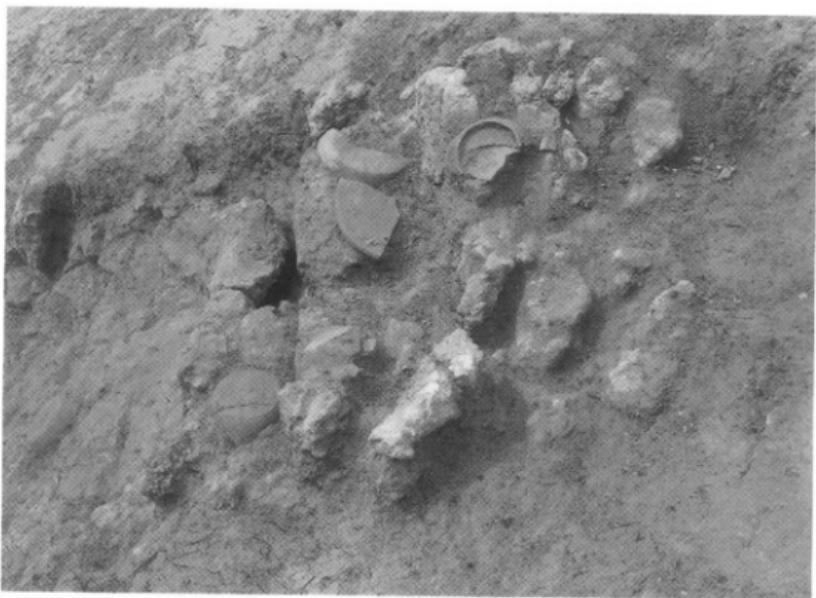
2号窯遠景（調査前）



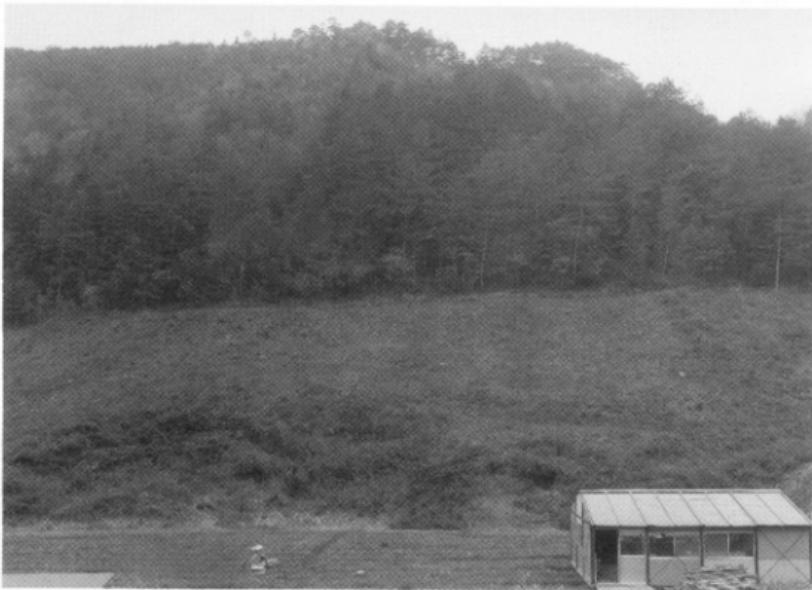
2号窯遠景（検出時）



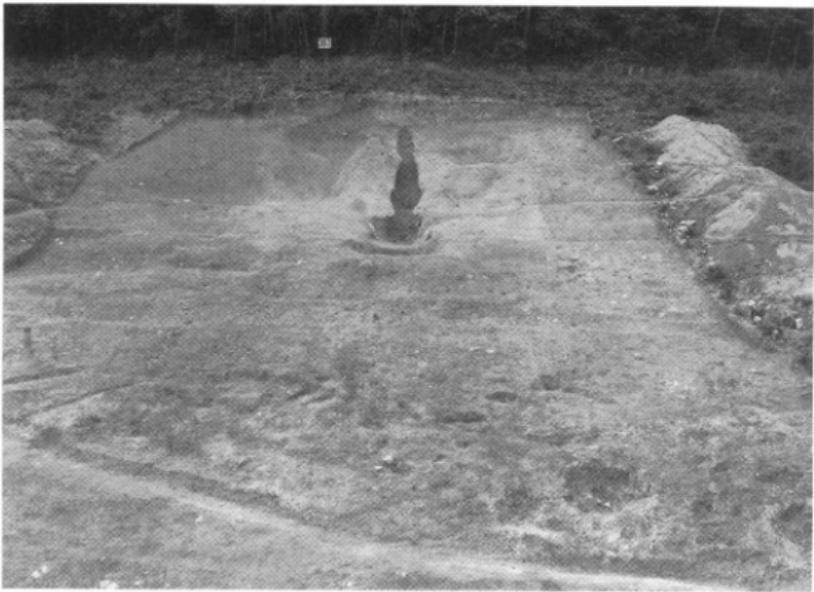
2号窯遠景（調査後）



2号窯焼成部先端近景



7号窯遠景（調査前）



7号窯遠景（調査後）



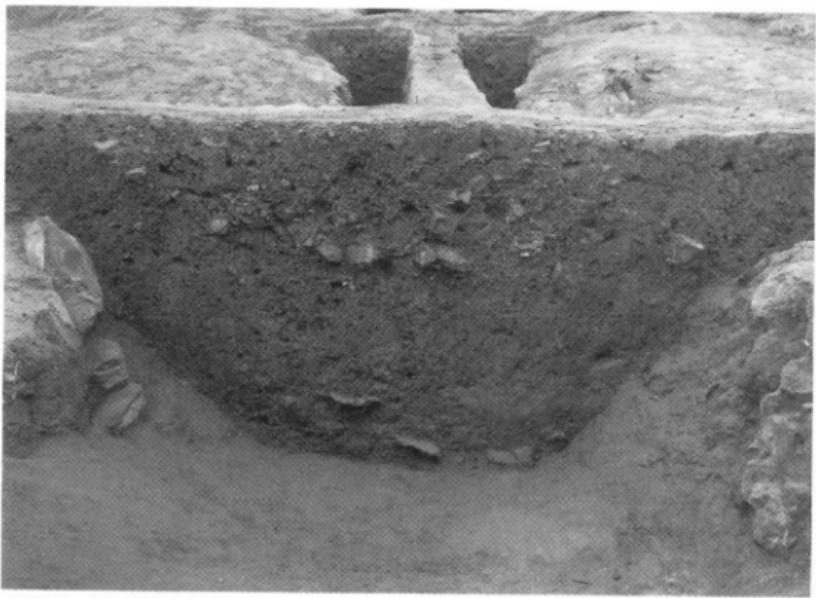
7号窯近景（調査後）



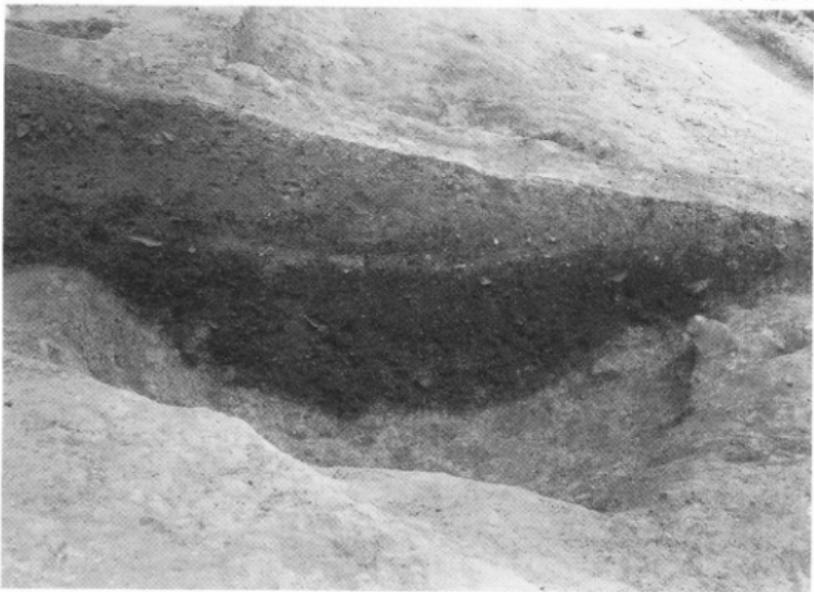
7号窯焼成部土器検出状況



7号窯焼成部付近土層断面



7号窯焚口付近土層断面



7号窯前庭部灰層断面



7号窯灰原土層断面



8号窯遠景（調査前）



8号窯遠景（調査後）



8号窯土層断面



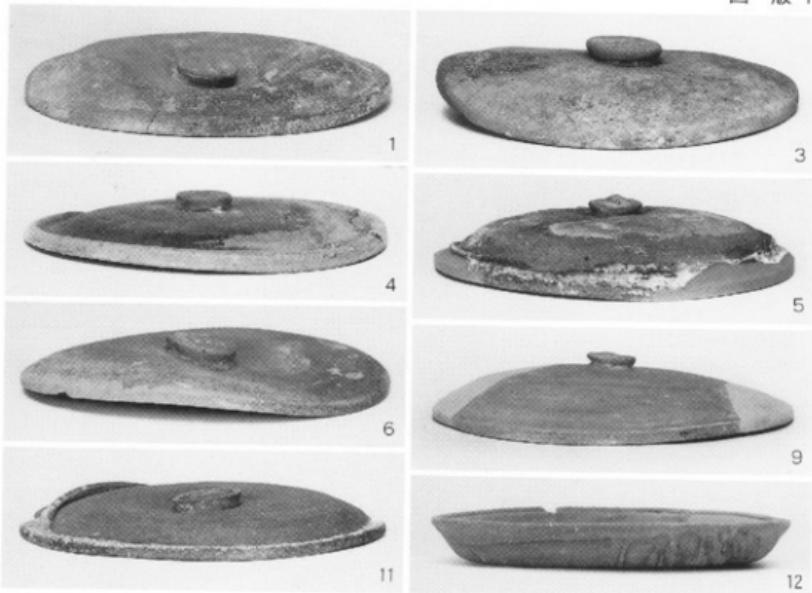
8号窯土器検出状況



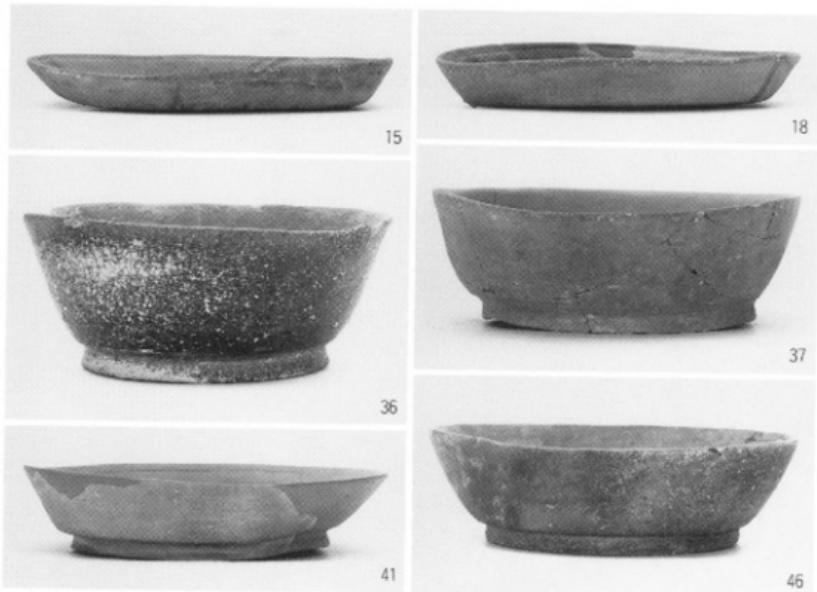
8号窯灰原土層断面



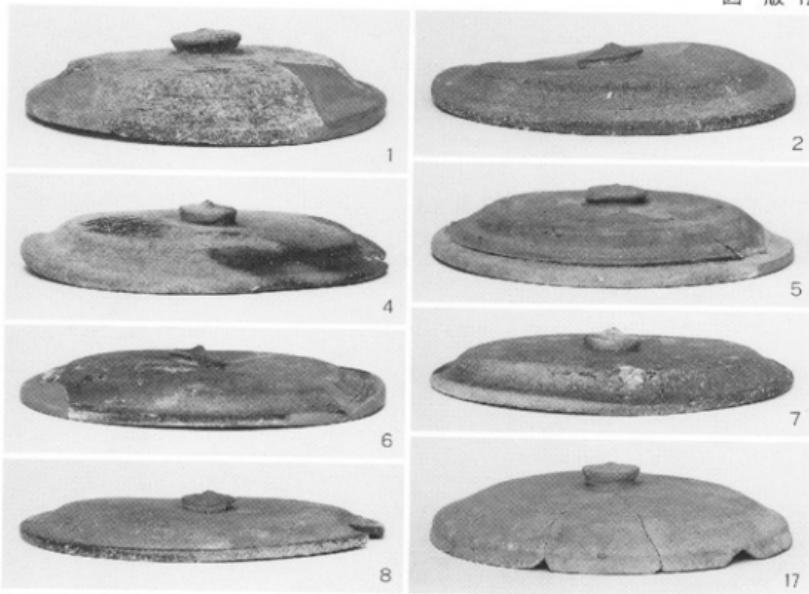
8号窯灰原土層断面



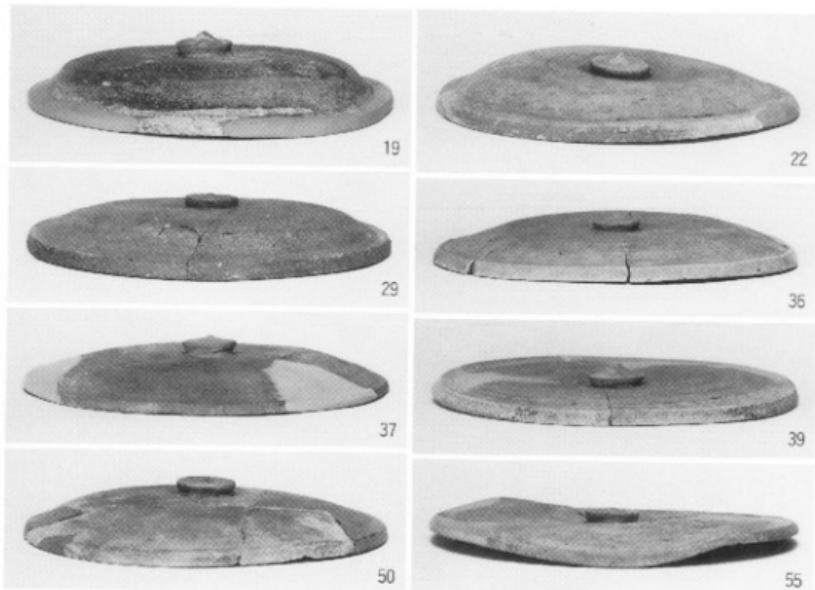
2号窯出土土器 (1)



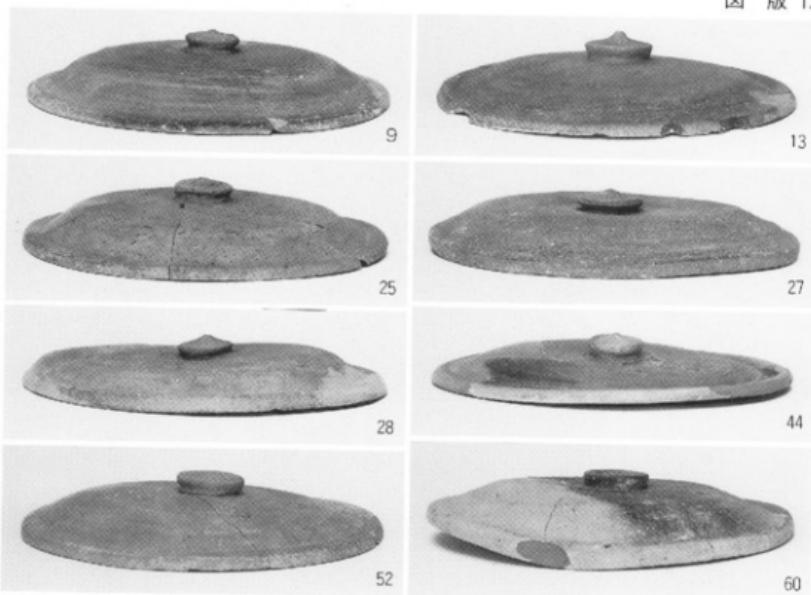
2号窯出土土器 (2)



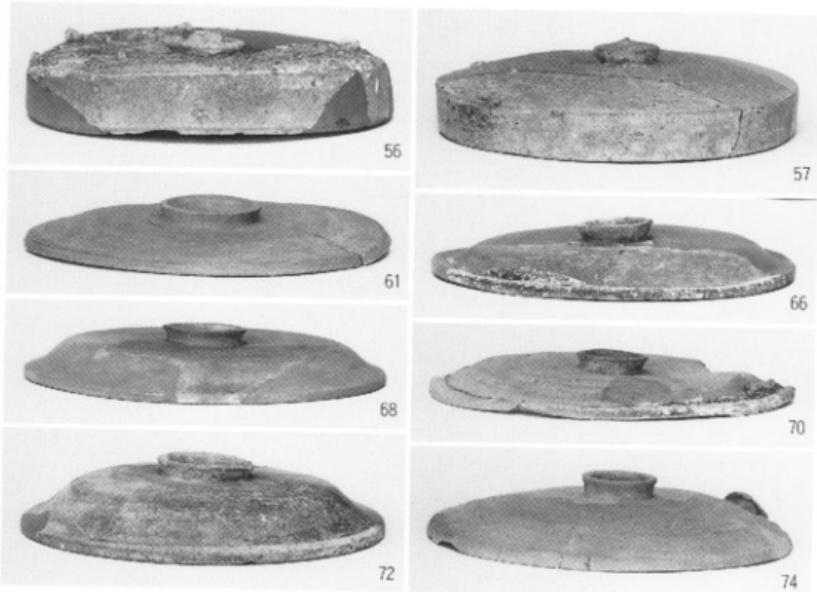
7号窯出土土器 (1)



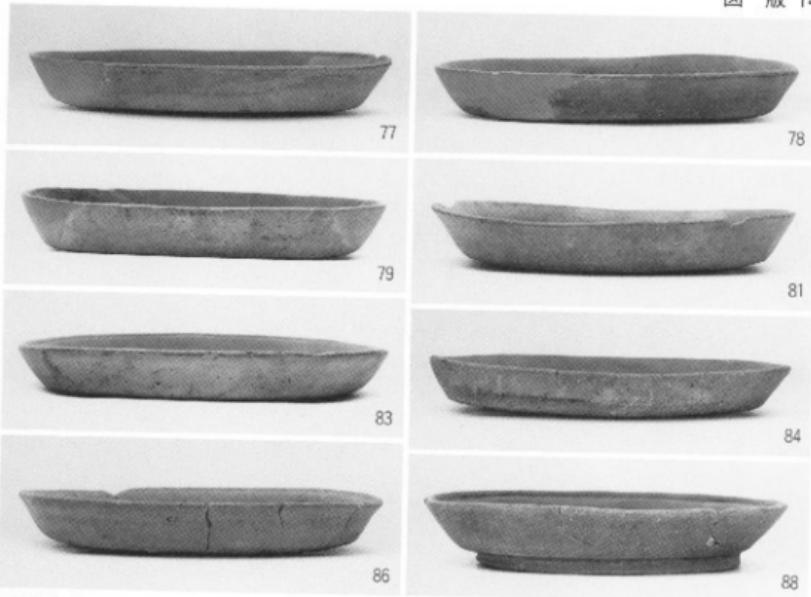
7号窯出土土器 (2)



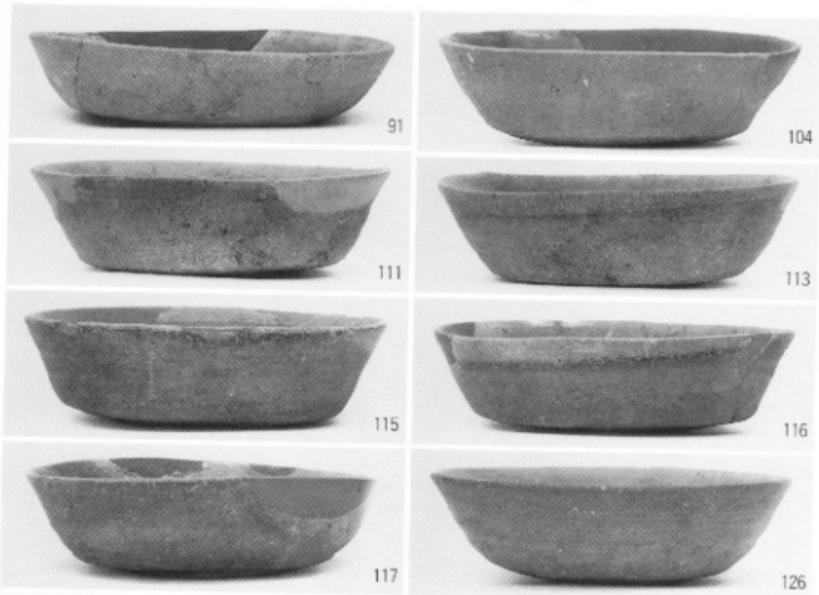
7号窯出土土器 (3)



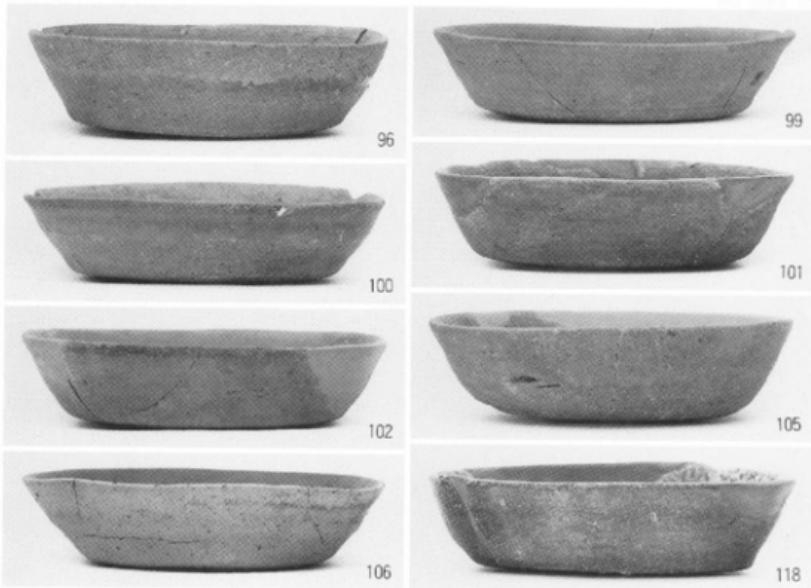
7号窯出土土器 (4)



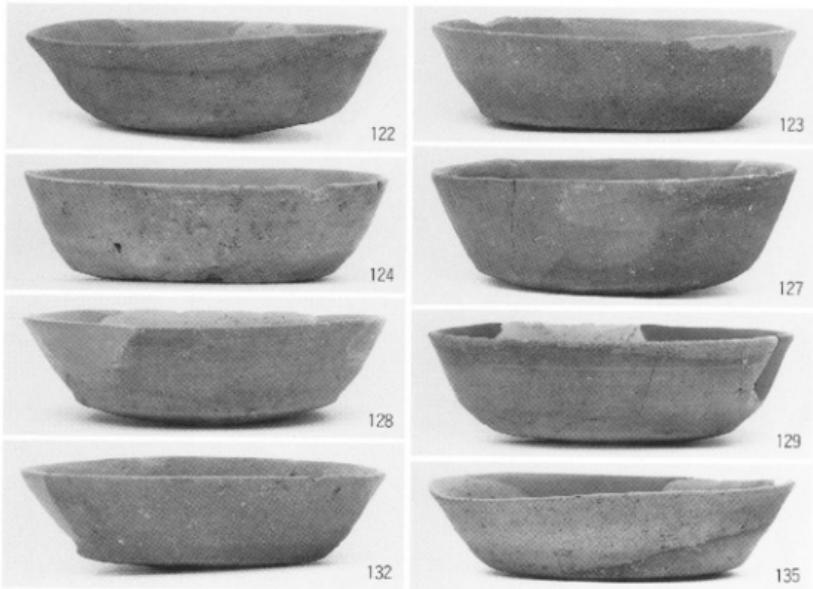
7号窯出土土器 (5)



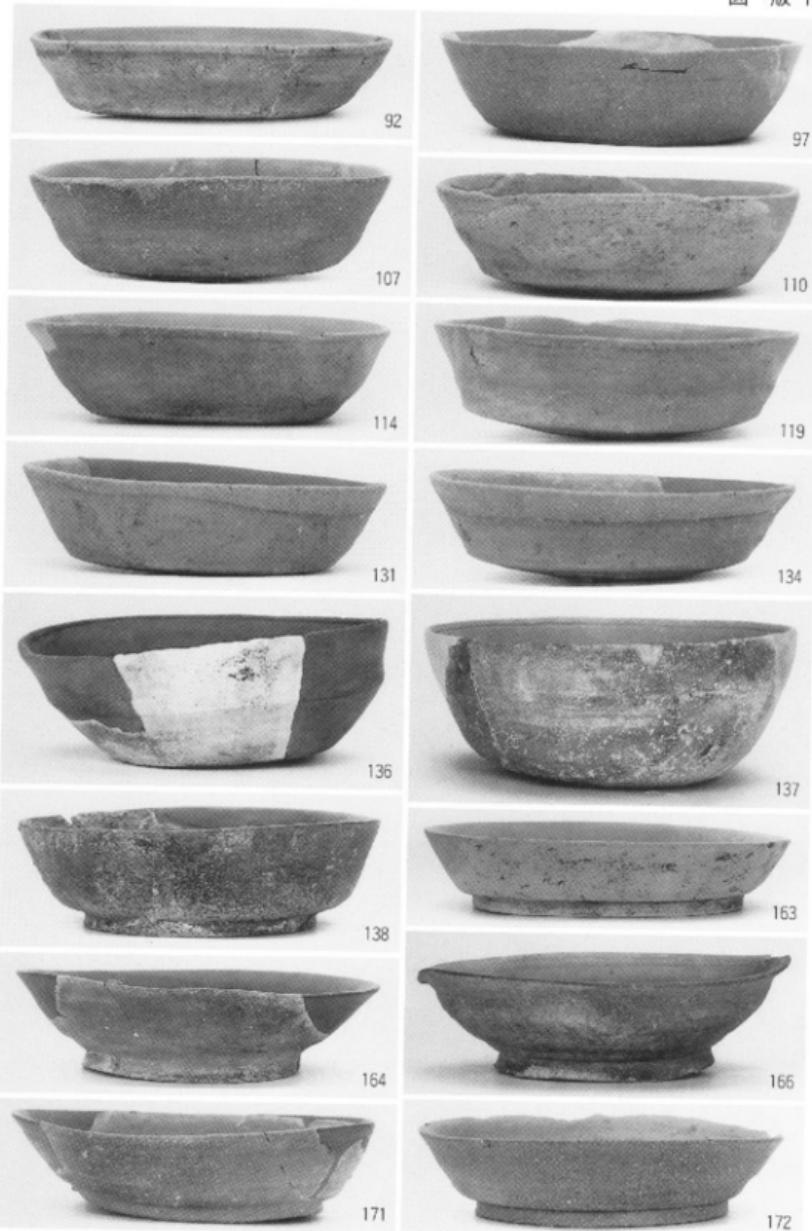
7号窯出土土器 (6)



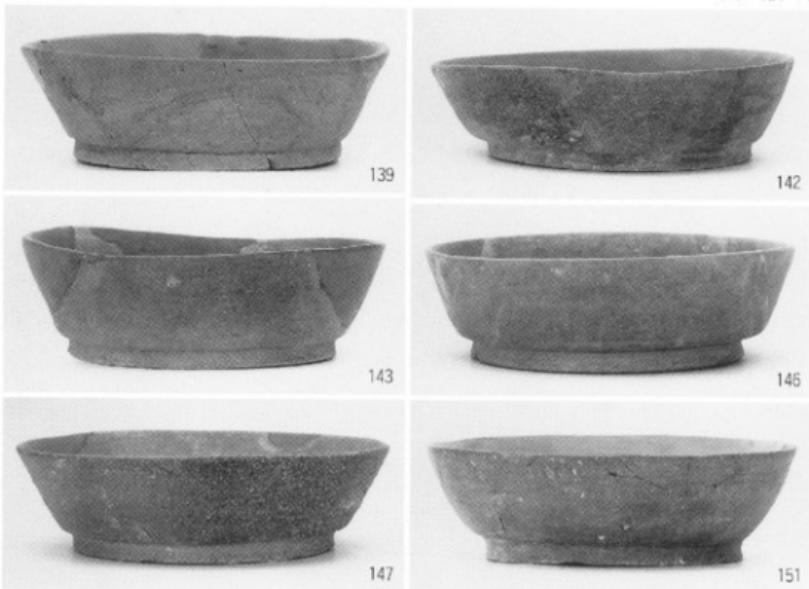
7号窯出土土器 (7)



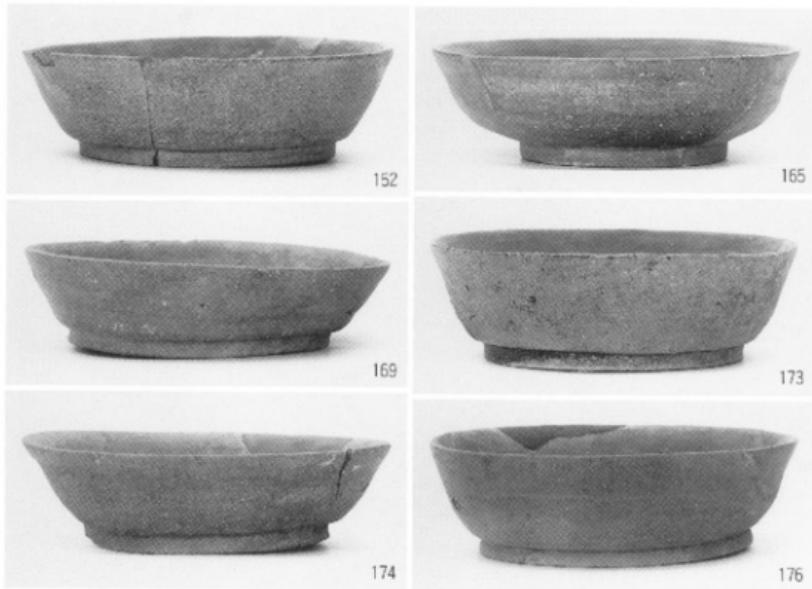
7号窯出土土器 (8)



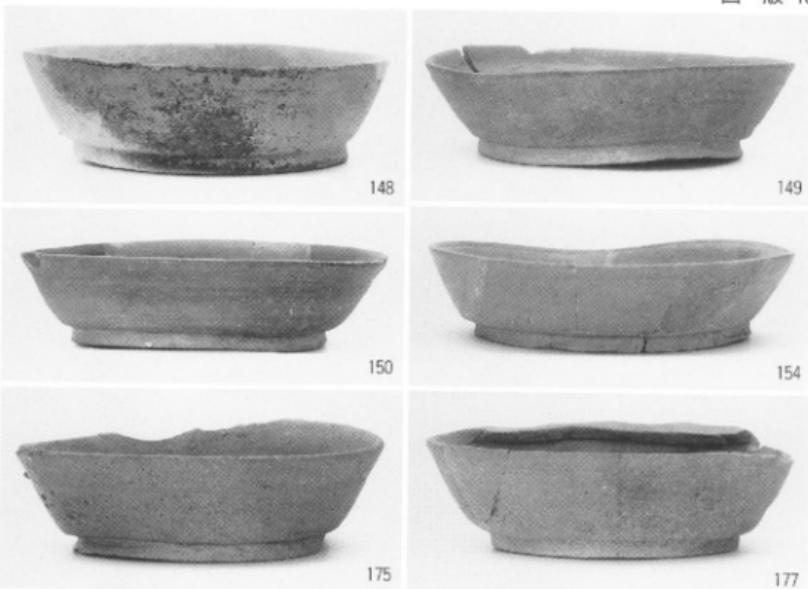
7号窯出土土器 (9)



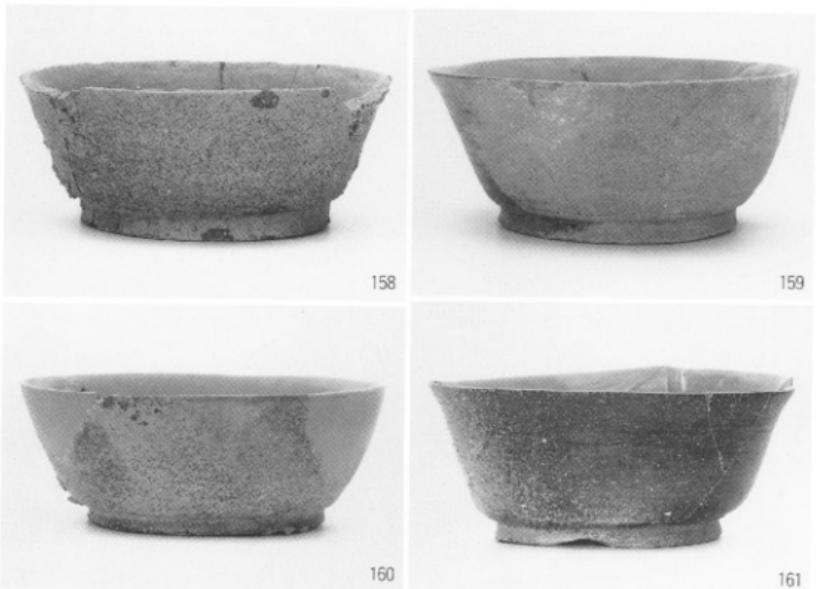
7号窑出土土器 (10)



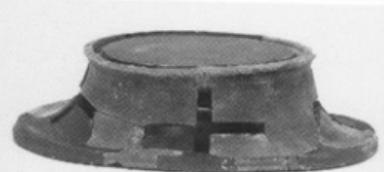
7号窑出土土器 (11)



7号窯出土土器 (12)



7号窯出土土器 (13)





204



206

7号窯出土土器 (05)



209

7号窯出土土器 (06)



222



7号窯出土土器 07



7号窯出土土器 08



265



268



500



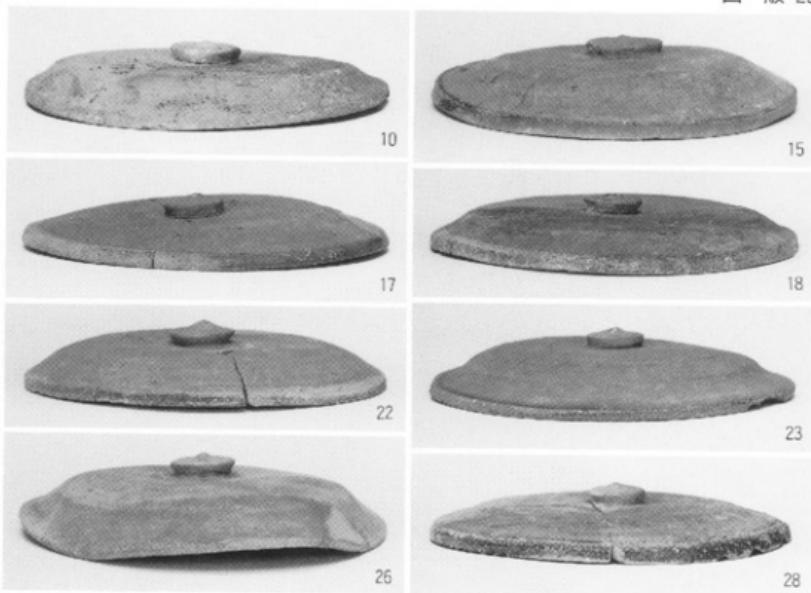
267



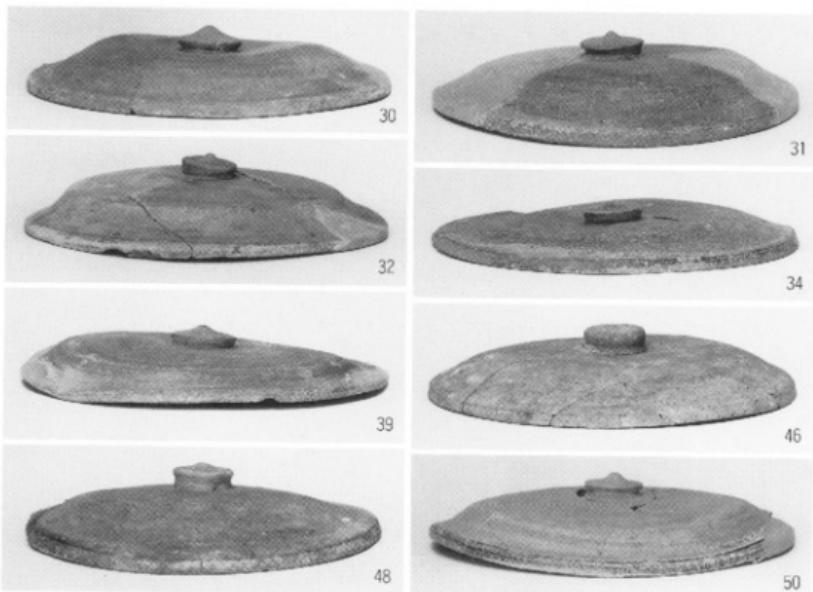
282



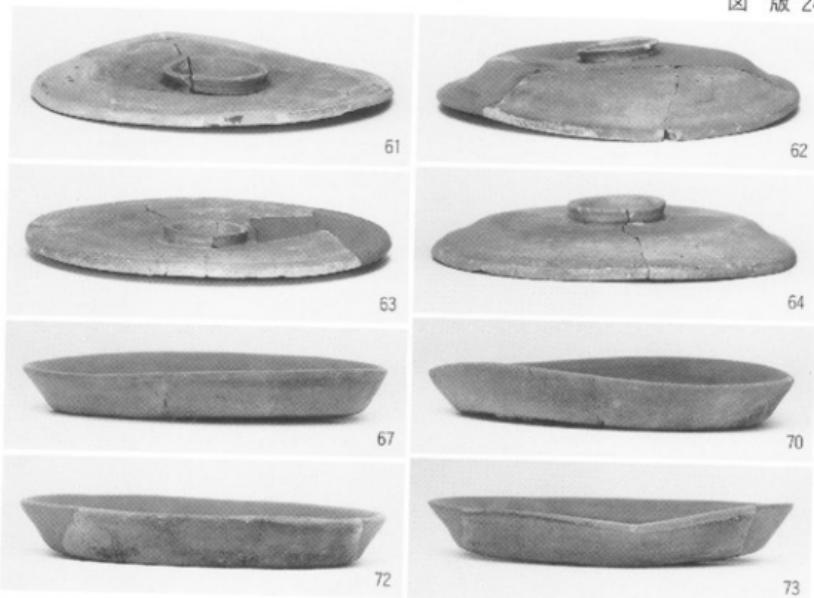
277



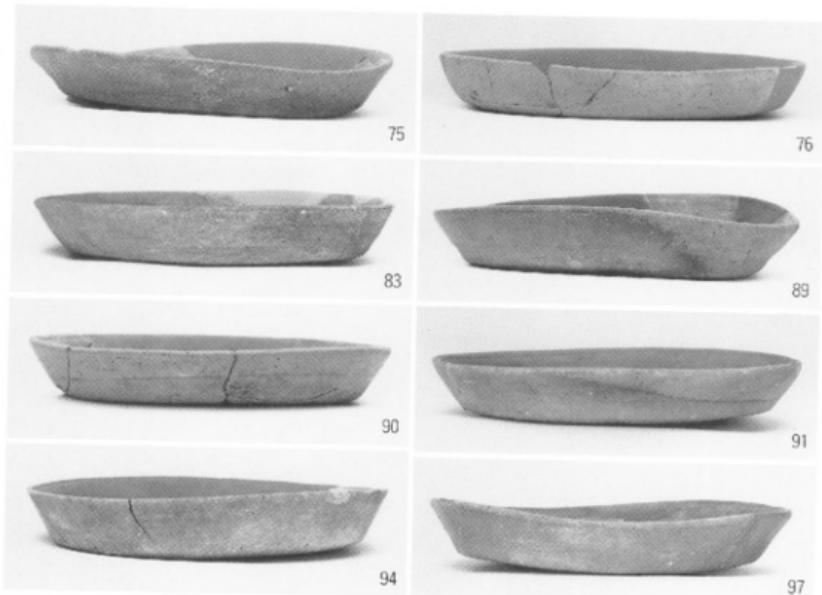
8号窯出土土器 (1)



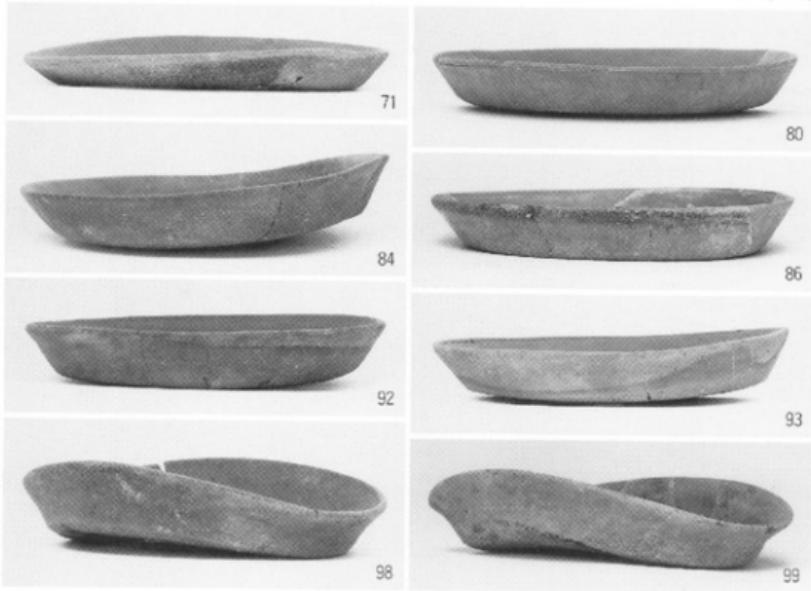
8号窯出土土器 (2)



8号窯出土土器 (3)



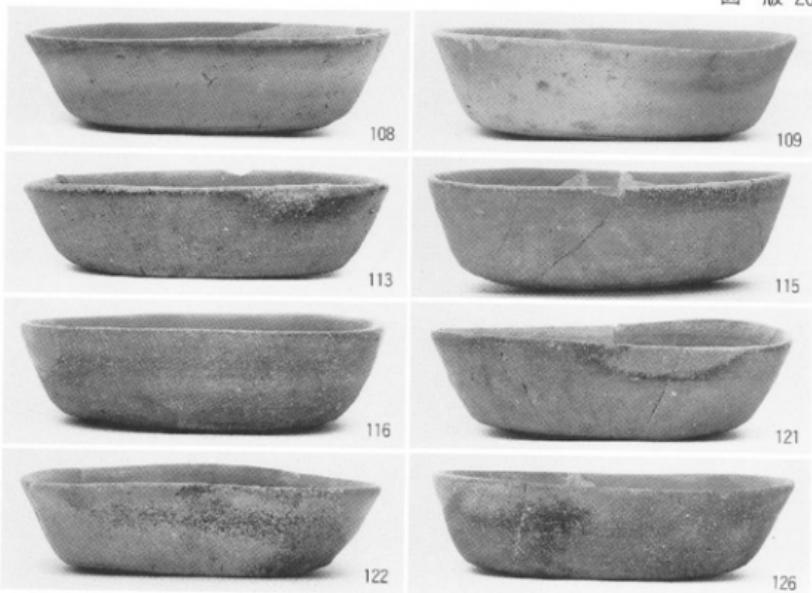
8号窯出土土器 (4)



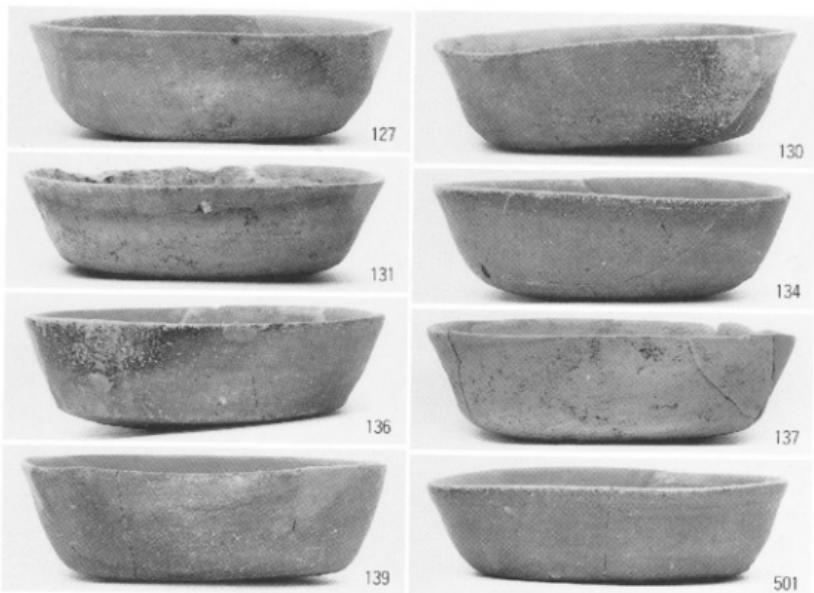
8号窯出土土器 (5)



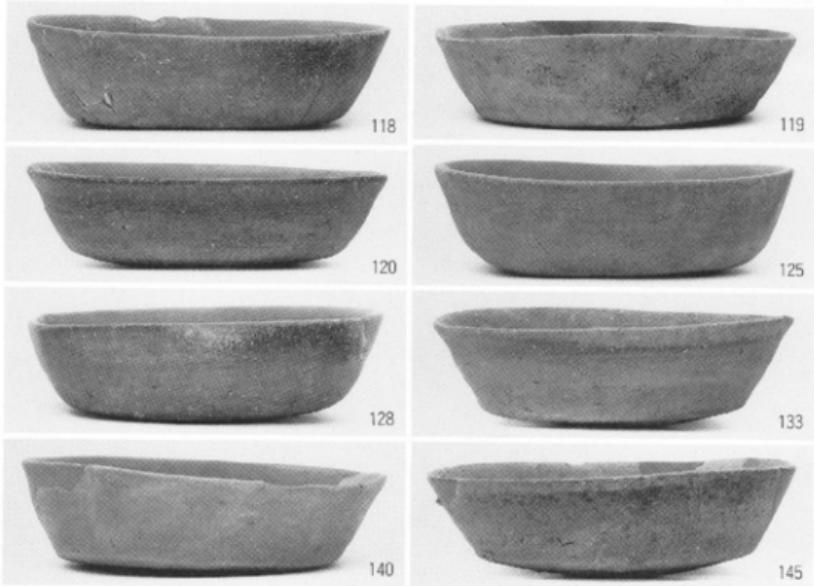
8号窯出土土器 (6)



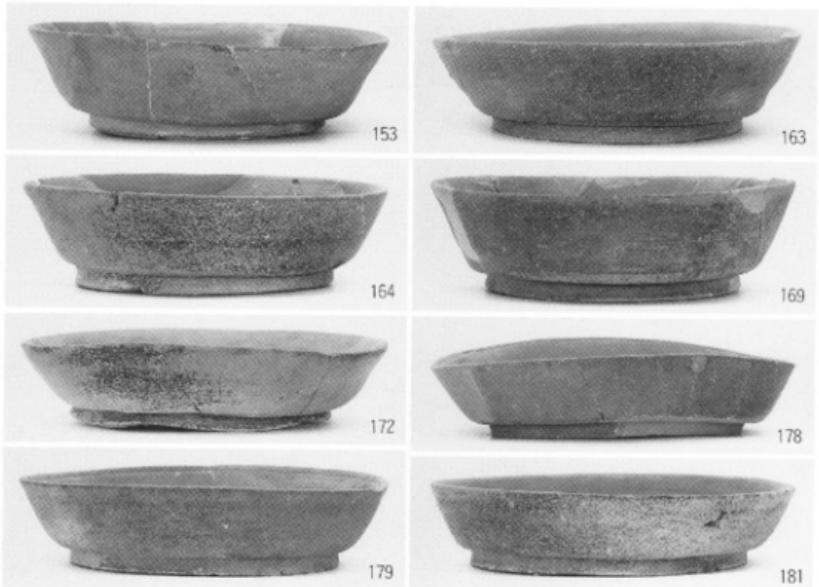
8号窯出土土器 (7)



8号窯出土土器 (8)



8号窯出土土器 (9)



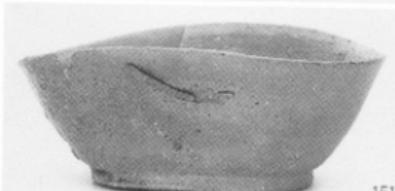
8号窯出土土器 (10)



148



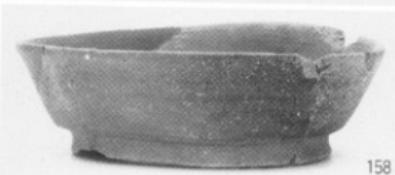
149



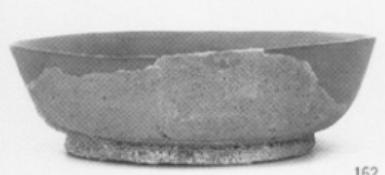
151



152



158

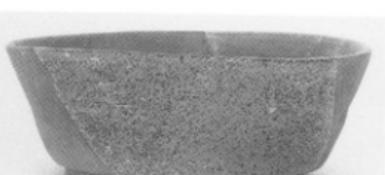


162

8号窯出土土器 (II)



165



166



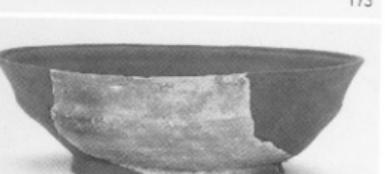
168



173



176

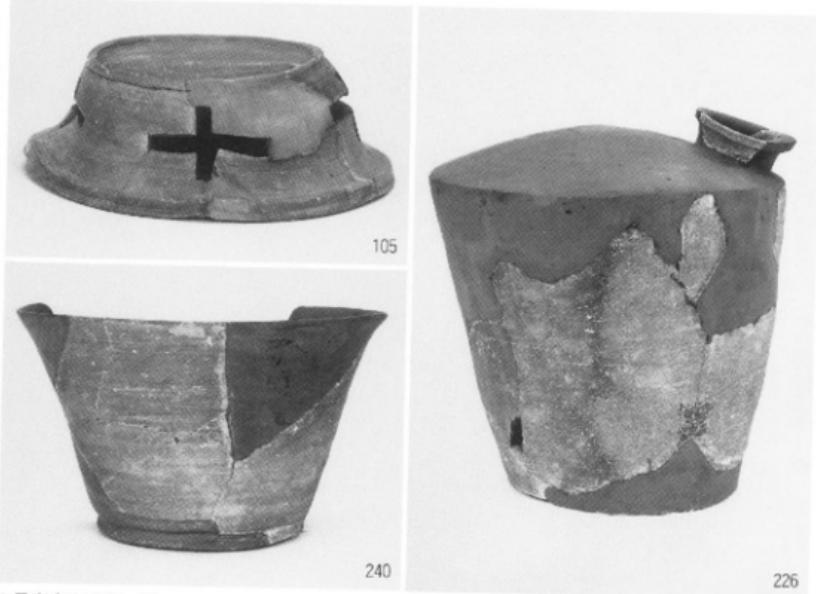


189

8号窯出土土器 (II)



8号窑出土土器 (13)



8号窑出土土器 (14)



198

202

8号窯出土土器 (15)



213

221

8号窯出土土器 (16)



231



195



502



503

上、8号窯出土土器 (1) 下、8号窯出土土器 (2)



239

8号窯出土土器 (19)



504

8号窯出土土器 (20)

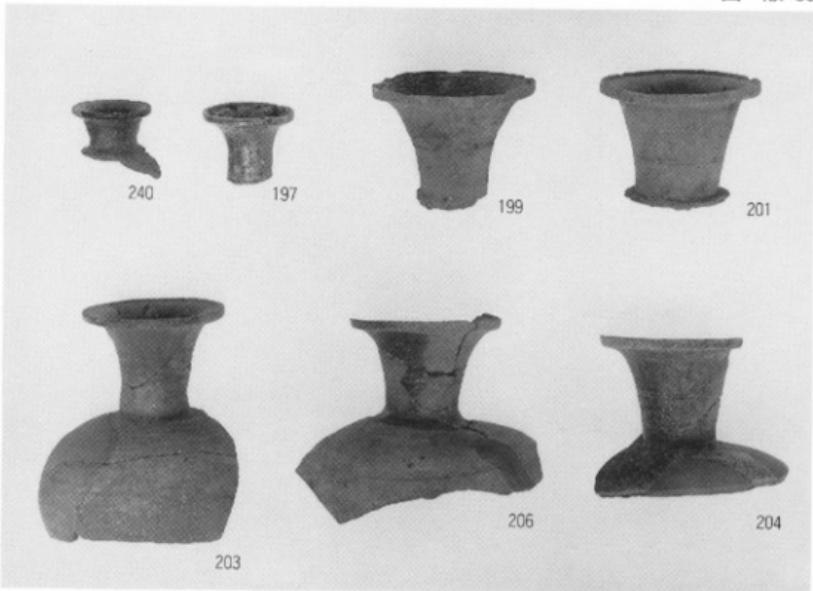


505

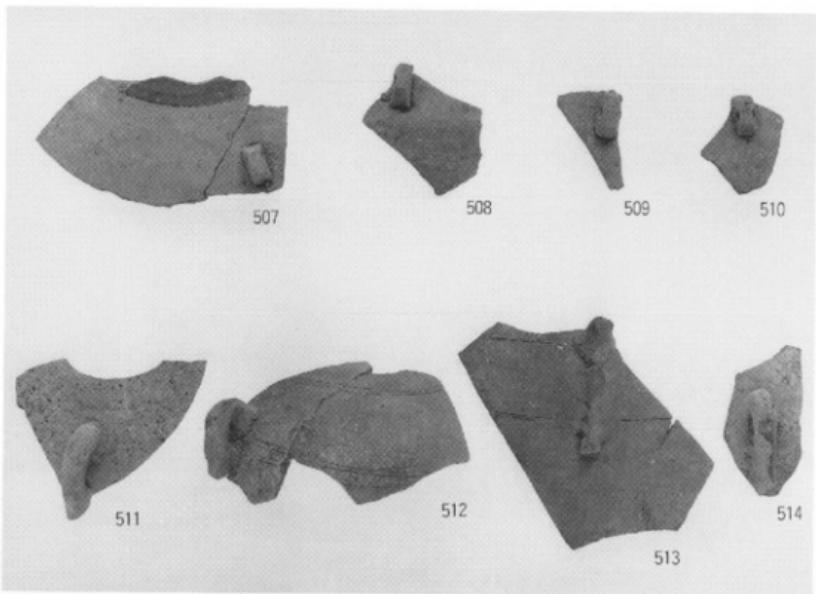
8号窯出土土器 (21)



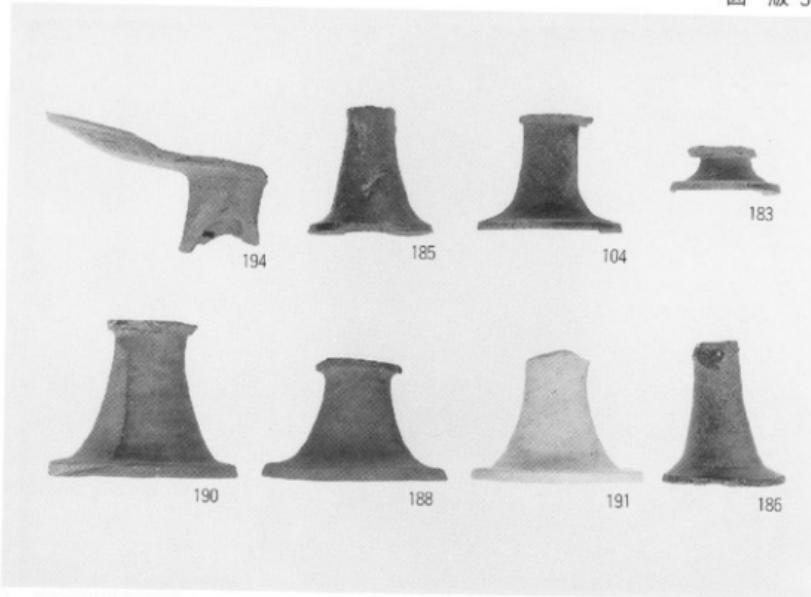
506



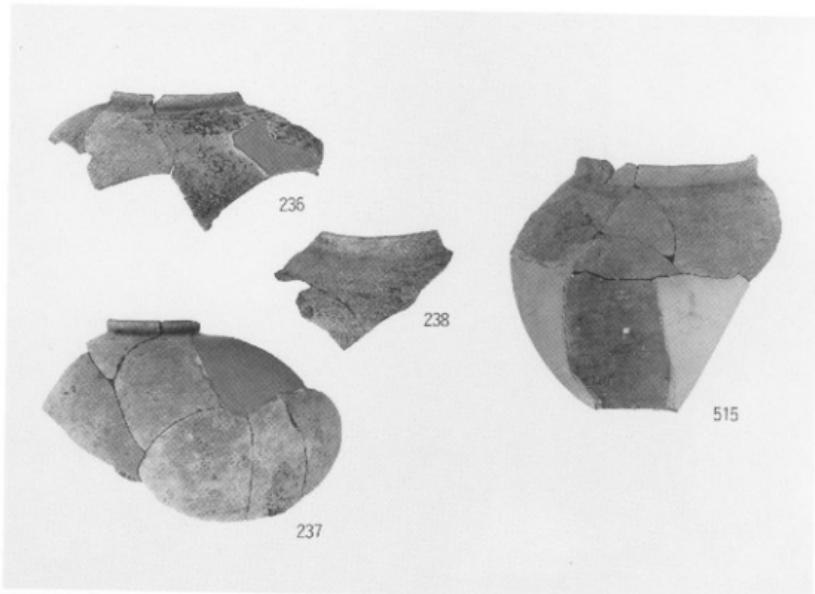
7・8号窯出土長頸臺（240のみ7号窯）



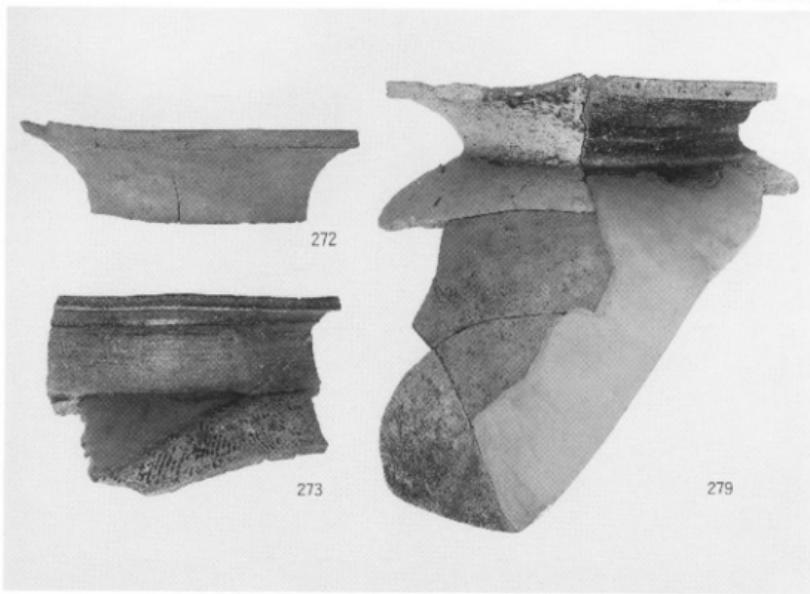
7・8号窯出土臺（耳）



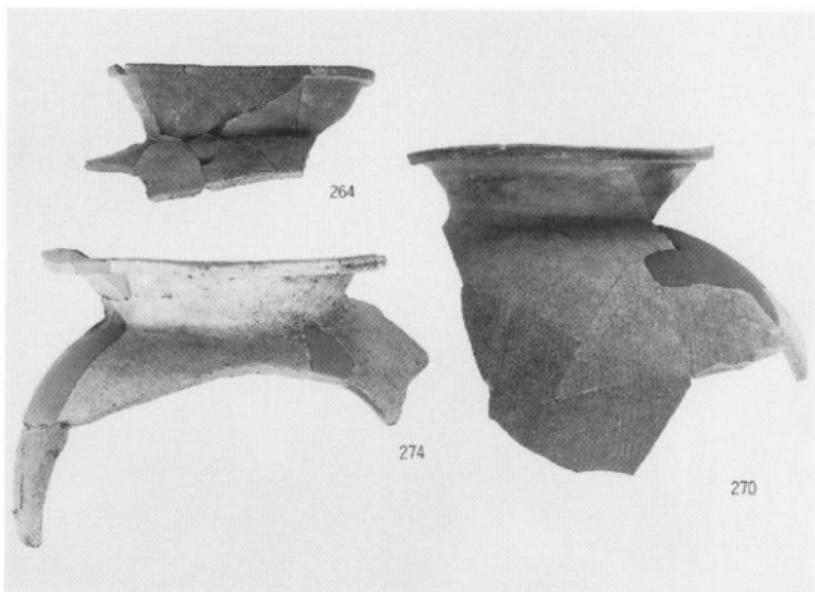
7・8号窯出土高坏 (104のみ8号窯)



8号窯出土短頸壺



7号窯出土壺 (1)



7号窯出土壺 (2)

兵庫県文化財調査報告書 第102冊

鴨庄古窯跡群(2)

—上牧2・7・8号窯跡—

発行日 1991年3月

編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所

発行 兵庫県教育委員会

印刷 船場印刷株式会社

〒670 姫路市定元町4-2

TEL (0792) 96-3535

FAX (0792) 97-3155